

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年10月28日
【事業年度】	第13期（自 2018年8月1日 至 2019年7月31日）
【会社名】	VALUENEX株式会社
【英訳名】	VALUENEX Japan Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役 社長執行役員 CEO 中村 達生
【本店の所在の場所】	東京都文京区小日向四丁目5番16号
【電話番号】	03-6902-9833（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 上席執行役員 CFO コーポレート本部長 鮫島 正明
【最寄りの連絡場所】	東京都文京区小日向四丁目5番16号
【電話番号】	03-6902-9833（代表）
【事務連絡者氏名】	取締役 上席執行役員 CFO コーポレート本部長 鮫島 正明
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第10期	第11期	第12期	第13期
決算年月	2016年7月	2017年7月	2018年7月	2019年7月
売上高 (千円)	349,711	343,440	507,744	557,885
経常利益又は経常損失 () (千円)	8,823	53,260	77,851	92,044
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 () (千円)	2,046	54,321	83,726	108,068
包括利益 (千円)	4,928	53,324	83,886	112,910
純資産額 (千円)	195,199	116,875	207,089	939,400
総資産額 (千円)	285,710	268,166	424,982	1,077,283
1株当たり純資産額 (円)	83.91	51.57	89.46	334.06
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額 () (円)	0.88	23.66	36.92	40.71
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	68.32	43.58	47.83	86.90
自己資本利益率 (%)	1.06	-	52.31	-
株価収益率 (倍)	-	-	-	-
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	17,798	36,696	78,170	87,363
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	17,905	2,335	352	11,159
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	18,130	24,911	35,569	749,430
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	210,654	197,486	310,997	958,089
従業員数 (人)	11	17	17	28
(外、平均臨時雇用者数)	(7)	(15)	(11)	(8)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第10期及び第12期は潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であるため、期中平均株価が把握できませんので記載しておりません。また、第11期は潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であり、期中平均株価が把握できませんので、また、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。第13期は潜在株式は存在するものの、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。
3. 第11期及び第13期の自己資本利益率については、親会社株主に帰属する当期純損失が計上されているため、記載しておりません。
4. 第12期以前の株価収益率については、当社株式は非上場であるため、記載しておりません。また、第13期については、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。
5. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(アルバイトを含む。)は、年間平均人員を()内にて外数で記載しております。
6. 第10期以降の連結財務諸表については、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づき作成しており、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。
7. 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っておりますが、第10期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額を算定しております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第9期	第10期	第11期	第12期	第13期
決算年月	2015年7月	2016年7月	2017年7月	2018年7月	2019年7月
売上高 (千円)	287,164	349,103	339,390	461,386	466,039
経常利益又は経常損失 () (千円)	39,846	4,393	48,379	49,508	100,334
当期純利益又は当期純損失 () (千円)	39,556	4,103	49,169	63,165	115,230
資本金 (千円)	100,000	100,000	100,000	100,000	522,895
発行済株式総数 (株)	7,754	7,754	7,754	2,326,200	2,856,300
純資産額 (千円)	192,184	196,288	122,118	191,610	921,600
総資産額 (千円)	277,701	286,740	272,531	408,798	1,047,980
1株当たり純資産額 (円)	24,785.17	84.38	53.89	82.64	327.71
1株当たり配当額 (円)	-	-	-	-	-
(うち1株当たり中間配当額) (円)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額 (円)	5,101.44	1.76	21.41	27.85	43.41
潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	69.21	68.46	44.81	45.94	87.63
自己資本利益率 (%)	22.94	2.11	-	40.76	-
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	-
配当性向 (%)	-	-	-	-	-
従業員数 (人)	8	11	17	17	25
(外、平均臨時雇用者数)	(6)	(7)	(15)	(11)	(8)
株主総利回り (%)	-	-	-	-	59.1
(比較指標: 東証マザーズ指数) (%)	(-)	(-)	(-)	(-)	(104.0)
最高株価 (円)	-	-	-	-	5,250
最低株価 (円)	-	-	-	-	2,021

(注) 1. 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2. 第9期、第10期及び第12期は潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であるため、期中平均株価が把握できませんので記載しておりません。また、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、第11期は潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であるため、期中平均株価が把握できませんので、また、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。第13期は潜在株式は存在するものの、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

3. 第11期及び第13期の自己資本利益率については、親会社株主に帰属する当期純損失が計上されているため、記載しておりません。

4. 第12期以前の株価収益率については、当社株式は非上場であるため、記載しておりません。また、第13期については、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

5. 1株当たり配当額及び配当性向については、配当を実施していないため記載しておりません。

6. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(アルバイトを含む。)は、年間平均人員を()内にて外数で記載しております。

7. 第10期以降の財務諸表については、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づき作成しており、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、EY新日本有限責任監査法人の監査を受けております。

なお、第9期の財務諸表については、「会社計算規則」(平成18年法務省令第13号)の規定に基づき算出した各数値を記載しております。また、当該各数値については、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づきEY新日本有限責任監査法人の監査を受けておりません。

8. 当社は、2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っておりますが、第10期の期首に当該株式分割が行われたと仮定し、1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額を算出しております。
9. 2018年10月30日に東京証券取引所マザーズ市場に上場したため、第12期以前の株主総利回り及び比較指標は記載しておらず、第13期の株主総利回りは2018年10月30日の株価を基準として算定しております。
10. 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所マザーズ市場における株価を記載しております。ただし、当社株式は、2018年10月30日から東京証券取引所マザーズ市場に上場しております。それ以前については、該当事項はありません。

2【沿革】

当社は、代表取締役社長の中村達生が「世界に氾濫する大量の情報を俯瞰的に可視化できないか」という視点に着想を得た独自の解析テクノロジーを事業化したことから始まります。当初、株式会社創知としてスタートいたしました。

当社の会社設立後、現在までの沿革は次のとおりであります。

2006年8月	株式会社創知（現当社）を設立（本店 東京都港区赤坂）
2007年4月	特許可視化ツールサービス提供開始
2008年5月	東京都港区六本木へ本店移転
2009年6月	東京都文京区小石川へ本店移転
2012年11月	TechRadar [®] （注1）をクラウドサービスにより提供開始
2013年7月	東京都文京区小日向へ本店移転
2013年11月	DocRadar [®] （注2）をクラウドサービスにより提供開始
2014年1月	社名をVALUENEXコンサルティング株式会社に変更
2014年2月	VALUENEX, Inc.（米国）設立
2014年11月	TechRadar [®] / DocRadar [®] にダッシュボード機能（注3）追加
2015年7月	社名をVALUENEX株式会社に変更
2016年1月	VALUENEX, Inc.（米国）の全株式を取得し、100%連結子会社化
2017年7月	TechRadar [®] / DocRadar [®] のユーザーインターフェース2.0バージョン提供開始
2018年10月	東京証券取引所マザーズ市場に株式を上場

（注1）当社の解析テクノロジーを利用した特許専用の解析アプリケーションサービス

（注2）当社の解析テクノロジーを利用した論文等の解析アプリケーションサービス

（注3）複数の分析データを一覧表示する機能

3【事業の内容】

当社グループは、VALUENEX株式会社（当社・東京都文京区）と100%子会社のVALUENEX, Inc.（米国・カリフォルニア州メンロパーク市）の2社から構成されており、世界中に氾濫する大量の情報を「信頼性」「俯瞰性」「客観性」「正確性」「最適性」の5つの独自の視点で融合し価値を創造することを理念としております。

当社グループの事業は当社の創業者代表取締役社長である中村達生が独自に開発したアルゴリズム（注1）を基盤にしたビッグデータ（注2）の解析ツールの提供（ASP（注3）サービス）とそれを用いたコンサルティングサービス及びレポート販売であり、これらはひとつのアルゴリズムから派生した事業であることから総称してアルゴリズム事業と称しております。したがって、当社グループは、アルゴリズム事業の単一セグメントのため、セグメント別の記載は省略しております。

各サービスの具体的な内容は以下のとおりであります。

（ASPサービス）

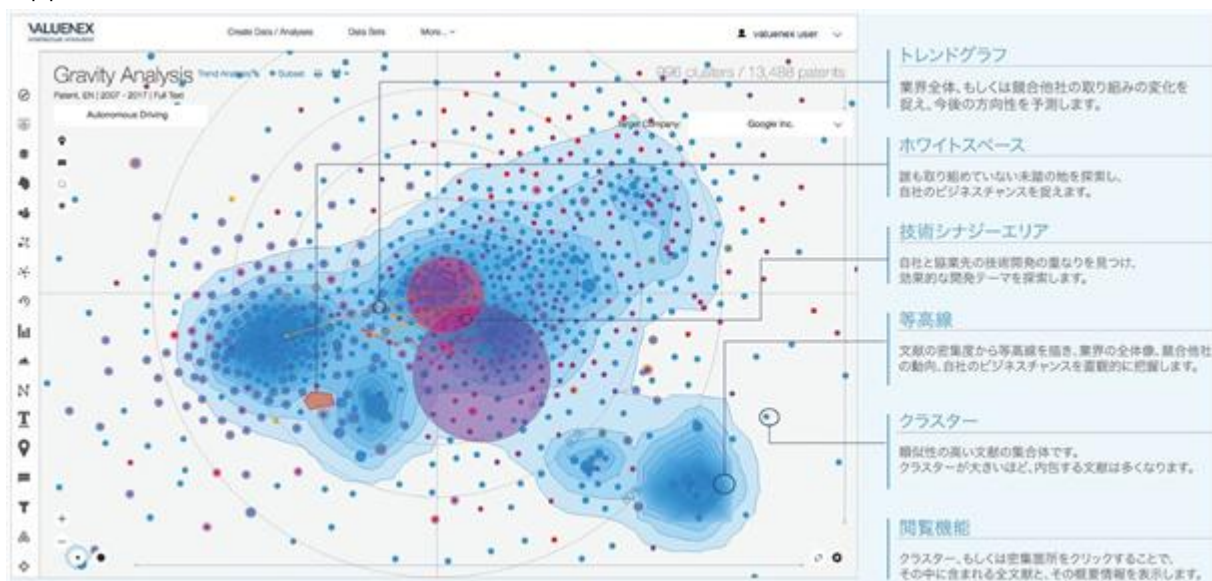
ASPサービスの内容と販売形態

ASP型ライセンスサービスであり、TechRadar® Scope（テックレーダー スコープ）、TechRadar® Vision（テックレーダー ビジョン）とDocRadar®（ドックレーダー）からなります。

まず、TechRadar®ですが、特許専用の解析ツールであります。これは、指定した技術文書をもとに特許データベースに登録されている全ての特許文書同士を比較したうえで、最大10万件までの特許文献間の類似度（特許データの間のそれぞれの内容がどれだけ近いのか、遠いのか）を自動的に判断し、それを目で見えるようにすること（可視化）により、膨大な特許群を一望に見渡すこと（俯瞰）ができるものであります。この可視化、俯瞰というやりかたは、文字を読んで理解するより、一目見て理解する方が早いという発想によるものであります。また、一般的な特許検索ツールは単語による検索条件に基づき、類似の特許データを検索、集計する等の結果は出すものの、特許データ同士の関係をどのくらい近いのか、遠いのかといった解析は行えません。それに対し、当社グループの解析ツールは、入力条件も、単語のみならず、共通性が高い単語を用いている文書間の距離（どのくらい近いのか、遠いのか）を数量化することが可能であります。ここが当社グループの情報解析ツールの大きな強みであります。

解析後のイメージは図1のようなものとなります。これらは1個のドット（点）が1つの特許を表しており、集合している領域は類似の特許が集中している分野であり、空白の領域は特許が存在していない分野というように可視化することができます。この読み解き方ですが、類似の特許が集中している場合は、競争が激しい分野であり、一方で特許が存在していないという場合は、何らかの理由（例えば、法の規制や技術的な制約あるいはまったく発想にないなど）により、競争がない分野であると読み解くことができます。この読み解きにより、例えば、将来の技術開発分野の特定（手つかずの領域に進出等）や買収先の技術領域の探索（強みの技術はどこで競争優位性があるのか等）あるいは潜在的なパートナー企業の探索（自社の技術領域とシナジーのある技術領域を有している企業はどこか）など様々な使い方ができます。

図1



TechRadar®には、TechRadar® ScopeとTechRadar® Visionがあります。TechRadar® Scopeは特許出願が既に出願されているものではないかの確認や新規事業や潜在市場のアイデアを練る場合に適したツールであり、概念検索（注4）で類似特許を上位最大1,000件まで表示します。一方TechRadar® Visionは大量の情報を分析するためのツールであり、最大100,000件の特許データを高精度に配置、表示します。

TechRadar®は、日本語、英語に対応しており、海外における特許解析も可能としております。

一方、DocRadar®は基本的にはTechRadar®と同じく最大10万件のテキスト文書情報を類似度評価によって可視化することで、従来、整理が難しくビジネス活用ができなかった文書情報（たとえばアンケートの自由記述など）を、類似度評価によって整理・クラスタリング（注5）、さらに可視化し、文書情報の定量分析を可能にする解析ツールであります。

TechRadar®との最大の違いではありますが、TechRadar®が日本、米国、欧州、その他の海外の特許データベースとリンクされているいわば特許のビッグデータ付属の解析ツールであるというのに対し、DocRadar®は、知財ビッグデータは付属されていない知財以外の多様なテキスト文書情報（たとえば、ニーズ・マーケット情報、社内文書、アンケート、インターネット情報、購買情報（POS）、判例情報、技術情報、研究情報など）を解析対象とする解析ツールという点であり、本質的には同じアルゴリズムを基盤としたツールであるといえます。

なお、DocRadar®は、日本語、英語に加え、中国語にも対応しております。

これらをまとめると表1のとおりとなります。

表 1

		解析対象	処理容量	想定ユーザ層	利用用途（例）
ASP	TechRadar® Scope	特許	最大1,000件まで	経営企画、マーケティング、知財部門等 （特定の特許や技術の類似特許を検索・可視化したい方）	・技術シーズの評価 ・競合分析 ・先行文献調査 ・無効資料調査
	TechRadar® Vision		最大10万件まで	研究開発部門、大学等 （業界・技術分野や企業の研究開発領域を俯瞰解析したい方）	・業界トレンド ・自社の技術的強み・弱み分析 ・研究開発の空白領域探索
	DocRadar®	その他の文献 （論文、新聞記事、SNS、クチコミ等何でも）	最大10万件まで	経営企画、マーケティング、知財部門、商品開発、研究開発等 （特許以外のあらゆるテキストデータから全体的な構造を俯瞰解析したい方）	・会社のイメージ調査 ・関連市場調査

現在、当社グループは、当社グループの存在価値を高めるべく、国内外にて各種セミナー、イベントに参加しており、その中で、ブース出展はもとより、代表取締役社長 中村達生自らもプレゼンテーションの機会を得ており、その機会をとらえて、新規顧客開拓がなされております。加えて、当社の100%子会社である VALUENEX, Inc.（米国）もグローバルベースでの販売活動をしております。

(コンサルティングサービス)

コンサルティングサービスの内容と販売形態

基本的に、TechRadar®とDocRadar®は、解析結果がどういう意味を示しているかを自ら読み解く必要がありますが、顧客の要望によっては、解析結果の読み解き結果をも求められる場合があります、その場合は、TechRadar®とDocRadar®を用いたコンサルティングという形で提供しております。

顧客は現在、主として大手企業の研究開発部門や経営企画部門であり、コンサルティングサービスから始めて、TechRadar®や DocRadar®の利用へ結びつくことも多く、密接にかかわっているといます。

コンサルティングサービスには、大別して調査コンサルティングとコーチングの2つの提供形態があります。調査コンサルティングは、顧客の要望に応じた調査・解析を当社グループが、顧客に代わってTechRadar®、DocRadar®を用いて実施するものであり、コンサルティングの一環として、コーチングを行う場合もあります。コーチングは顧客の内部の情報解析人材を育成するという観点によるものであります。

これらをまとめると以下の表2のとおりとなります。

表2

		解析対象	期間	想定ユーザ層	利用用途(例)
コンサルティング	調査コンサルティング	文献全般 (論文、新聞記事、SNS、 クチコミ等何でも)	1ヶ月間から1年間程度	経営企画、マーケティング、 知財部門等 (自らデータ解析する人的、 時間的経営資源がない方)	<ul style="list-style-type: none"> ・競合分析 ・自社の技術的強み・ 弱み分析 ・会社のイメージ調査 ・関連市場調査 ・新規事業探索 ・技術トレンド
	コーチング		随時	経営企画、マーケティング、 知財部門、商品開発、研究開 発等 (顧客内部でデータ解析する 人材を育成したい方)	

(レポート販売)

レポート販売の内容と販売形態

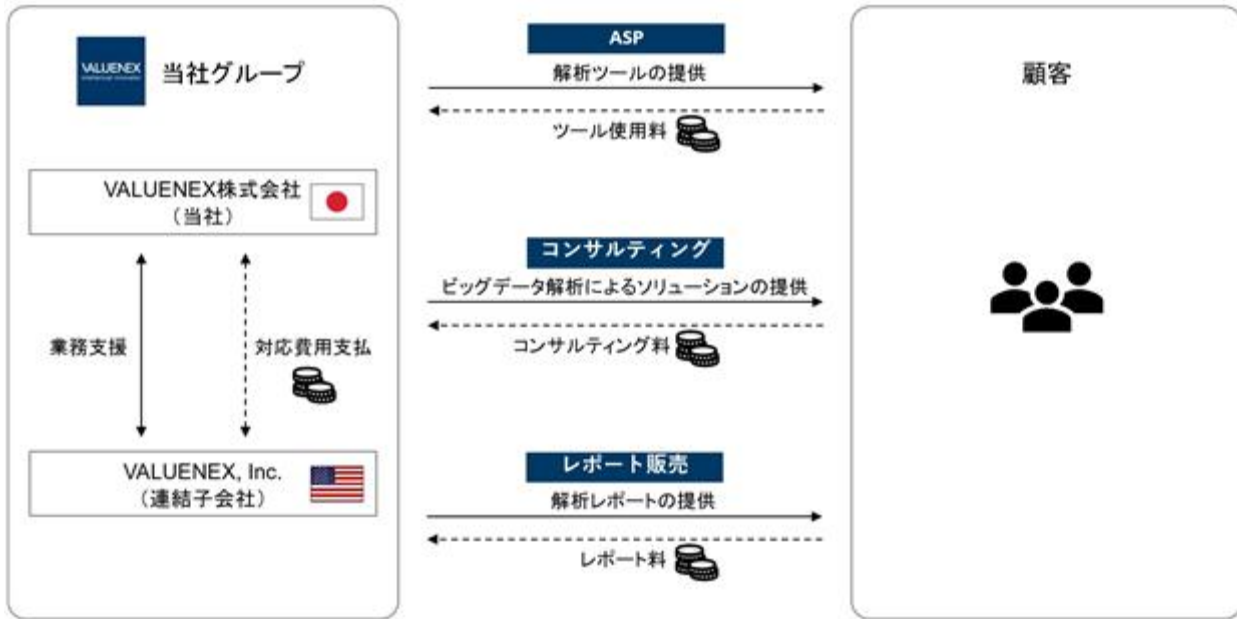
TechRadar®とDocRadar®により、短期でかつ簡易なレポートを提出するものであります。

現在、日本経済新聞社の運営する日経テレコンというデータベースシステムを経由して、一般の顧客へ提供するものと直接、顧客へ提供しているものの2つがあります。

前者は、そのときどきの時宜にかなった技術トピックスや投資トピックスを題材に当社グループがTechRadar®とDocRadar®を用いて、解析レポートを作成し、それを日経テレコンのサイトを通じて、販売するというものであり、対象は個人及び法人であります。

また、後者は、顧客の有している企業情報やマーケット情報を材料に、当社グループがTechRadar®とDocRadar®を用いて、解析レポートを作成し、その顧客に提供するものであります。

[事業系統図]



用語解説

本項「3 事業の内容」において使用しております用語の定義について以下に記します。

	用語	用語の定義
(注1)	アルゴリズム	コンピュータ上の解を得るための具体的手順。
(注2)	ビッグデータ	従来、膨大な量であるため、処理が困難と思われていた大量のデータ。
(注3)	ASP (Application Service Provider)	アプリケーションソフト等のサービス(機能)をネットワーク経由で提供するプロバイダ(= provide 提供する 事業者・人・仕組み 等全般)のこと。
(注4)	概念検索	蓄積された種々のデータから、概念が類似する情報を自動的に検索する情報検索の一手法。
(注5)	クラスタリング	データの集合を部分集合(クラスタ)に切り分けて、それぞれの部分集合に含まれるデータのある共通の特徴により、より分けるデータ解析の一手法。

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の所有 (又は被所有)割合 (%)	関係内容
(連結子会社) VALUENEX, Inc. (注)	米国カリフォルニア州 メンロパーク市	1,000 千米ドル	ASP コンサルティング	100.0	営業取引 役員兼務

(注) 特定子会社に該当しております。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

2019年7月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
アルゴリズム事業	28 (8)
合計	28 (8)

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(アルバイトを含む。)は、年間の平均人員を()内にて外数で記載しております。

2. 当社グループはアルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(2) 提出会社の状況

2019年7月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
25 (8)	35.8	1.5	6,847,511

(注) 1. 従業員数は就業人員であり、臨時雇用者数(アルバイトを含む。)は、年間の平均人員を()内にて外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

3. 当社は、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載を省略しております。

(3) 労働組合の状況

当社グループの労働組合は結成されておりませんが、労使関係は安定しております。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、本書提出日現在において当社グループが判断したものであります。

(1)経営方針

当社グループの経営方針であります。当社グループの強みである独自のアルゴリズムは、当社グループの成長の源泉であり、これをあらゆる形（たとえば、ライセンス提供、コンサルティングなど）でビジネスとして立ち上げてゆくことにより、持続的な成長を実現させるというものであり、その事業化の形は多様であると考えております。

(2)経営戦略等

当社グループの経営戦略は、当社グループの強みであるアルゴリズムを活用し得る企業体とのコラボレーションを図ることにより、新たな市場を創出するというものであります。これは、当社グループの人的、物的、財務的資源の足りない部分を他の企業体の資源で補うことにより、当社グループの潜在的な成長性を何倍にも引き上げるというものであり、例えば、ビッグデータを有するもののその解析に課題を抱えている企業体との協業などが想定されます。

(3)経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

先進的で高品質なサービスを安定的に提供してゆくためには、健全な財務基盤の維持が重要であると考えており、営業利益を収益性の指標としております。なお当連結会計年度においては76,347千円の営業損失となりました。

(4)経営環境

当社グループは、そのときどきの技術の発展がビッグデータを取り巻く領域（以下「ビッグデータ市場」）を規定するものと考えており、その発展段階に応じて、今後も進化し続けると考えております。

具体的には、1990年代から始まるインターネットの普及とデータのデジタル化の段階から、2000年代のヤフーやGoogleに代表される検索エンジン（注1）の普及の段階、そして、2010年代の情報通信技術（ICT）（注2）の進展の段階から現在は人工知能（AI）（注3）の拡大の段階にあり、将来は、量子コンピュータ（注4）の段階へ進展することになるものと考えております。

このような認識のもと、当社グループを取り巻くいわゆるビッグデータ関連市場はまだこれから成長が期待される事業領域であると考えており、当社グループのアルゴリズム技術は人工知能（AI）が脚光を浴びている昨今、その取り巻く潜在市場も大きいと予想されます。加えて、特に知的財産分野は、2003年3月にクールジャパン戦略の一環で、内閣府に知的財産戦略本部を設置されたことから、国策的な位置づけであり、外部環境は非常に有望視されるものと思われま。一方、内部環境も、専門性の高い人材が採用され、成長するうえで欠かせない人的な基盤が確立されつつあり、これも有望視される所以であります。

(5)事業上及び財務上の対処すべき課題

新規事業分野の開拓

当社グループの事業領域は、大量の文書解析のニーズがある分野全てにわたっておりますが、現状、特に知的財産権の分野に集中しております。当社グループは、これをファイナンス分野、ヘルスケア分野、法曹分野などに展開していくことが可能であり、新規事業分野への開拓が重要と考えております。

VALUENEXブランドの強化

予測分析のリーディングカンパニーとしての地位を築くことを目標としているなかで、社名でもあるVALUENEXという名称をサービス名にも昇華させ、さらにはブランド化していきたいと考えております。そのためには認知度向上が不可欠であり、インターネットなどを有効に利活用しながら、定着を図る方針であります。

人材の確保と育成

当社グループは、さらなる事業成長を目指しておりますが、そのなかで、最も重要な経営資源は人材であると考えております。そのために、新たな人材を採用する必要がありますが、現在、景気の向上も相まって、優秀な人材については、他社との競合となってきております。当社グループは、上場したことにより、知名度が上がるとともに、安定的な財務基盤を確立することを通じ、優秀な人材が確保されるものと期待しております。

海外展開

当社グループは、当初より、市場規模が大きいと考えられることから、海外展開を見据えた営業活動を行っており、また、現在、スイス（ジュネーブ）に社員を派遣しており、情報収集を中心に活動を行っております。

最近では、海外イベントにおいて、当社の社長に対してプレゼンターの依頼がくるなど、少しずつ、当社の存在感が海外にも浸透してきていると考えており、海外展開をさらに積極的に推進していく方針であります。

内部管理体制の強化

当社グループが、成長を遂げるに際して、無視しえないのが内部管理体制の問題です。従来より当社グループは監査役会の設置、独立取締役の選任、内部監査の強化などを通じて、コンプライアンス強化に努めておりますが、組織が大きくなるとともに、事業が拡大するにつれて、コンプライアンス遵守が甘くならないようにする必要があります。そのため、全従業員へのコンプライアンス・マニュアルの遵守の徹底などを図ってまいります。

用語解説

本項「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」において使用しております用語の定義について以下に記します。

	用語	用語の定義
(注1)	検索エンジン	インターネットに存在する情報（ウェブページ、ウェブサイト、画像ファイル、ネットニュースなど）を検索する機能及びそのプログラム。
(注2)	情報通信技術（ICT）	Information and Communication Technology コンピュータやインターネットに関連する情報通信技術のことであり、従来から使われている「IT（Information Technology）」に代わる言葉として使われております。
(注3)	人工知能（AI）	Artificial Intelligence 人間の脳が行っている知的な作業をコンピュータで模倣したソフトウェアやシステム。具体的には、人間の使う自然言語を理解したり、論理的な推論を行ったり、経験から学習したりするコンピュータプログラムなどのことをいいます。
(注4)	量子コンピュータ	量子力学の原理を情報処理に応用するコンピュータのこと。スーパーコンピュータが数千年もかかって解く問題を、数秒で計算できるようになると期待されております。

2【事業等のリスク】

本書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、本書提出日現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 巨大資本データベース事業会社による当社グループの解析技術市場への参入について

当社グループの解析技術は、独自の技術であり、他社による模倣は困難であると考えておりますが、巨大資本データベース事業会社が当社グループの解析技術市場に参入しない保証はなく、参入があった場合には、業績に影響が生じる可能性があります。

(2) システム障害について

当社グループは、TechRadar[®]とDocRadar[®]のASPサービスを展開しておりますが、天災、サイバー攻撃、事故などに起因した通信ネットワークの切断により、システム障害が発生する可能性があります。

当社グループではデータのバックアップ、データセンターの分散配置などによりトラブルに対する備えをしておりますが、システム障害が発生した場合には、一時的なサービス提供の停止等により、業績に影響が生じる可能性があります。

当社グループの事業は、サービスの基盤をインターネット通信網に依存しております。そのため、顧客へのサービス提供が妨げられるようなシステム障害の発生やサイバー攻撃によるシステムダウン等を回避すべく、稼働状況の監視等により未然防止策を実施しております。しかしながら、このような対応にもかかわらず大規模なシステム障害が発生した場合等には、業績に影響が生じる可能性があります。

(3) 知的財産権について

当社グループでは「VALUENEX[®]」「TechRadar[®]」「DocRadar[®]」等の名称及びサービス名について商標登録を行っているほか、文書検索装置及び文書検索方法の特許（日本：第5159772号。米国：US 8,818,979 B2）を取得しております。今後も知的財産権の保全に積極的に取り組む予定ですが、当社グループの知的財産権が第三者に侵害された場合には、解決までに多くの時間及び費用がかかるなど、業績に影響が生じる可能性があります。

また、当社グループによる第三者の知的財産権の侵害については、可能な範囲で調査を行い対応しております。しかしながら、当社グループの事業領域における第三者の知的財産権を完全に把握することは困難であり、当社グループが認識せずに他社の特許等を侵害してしまう可能性は否定できません。この場合には当社グループに対する損害賠償請求や、ロイヤリティの支払要求等が行われること等により、業績に影響が生じる可能性があります。

(4) 季節変動について

当社グループは、当社グループの顧客である企業あるいは官公庁の会計年度の関係により、3月にコンサルティングの売上高が増加する傾向にあるため、通期の業績に占める第3四半期連結会計期間の比重が高くなっております。また、売上高の小さい四半期においては、販売費及び一般管理費等の経費は固定費として毎四半期比較的均等に発生するため、営業赤字となることがあります。

このため、特定の四半期業績のみをもって当社グループの通期業績見通しを判断することは困難であり、第3四半期連結会計期間の業績如何によっては通期の業績に影響が生じる可能性があります。

当社グループは、TechRadar[®]とDocRadar[®]のASPの販売を拡大していくことにより、季節変動性の緩和を図っていく方針ですが、今後につきましても、第3四半期連結会計期間依存型の傾向は続くことが考えられます。

なお、当連結会計年度における当社グループの四半期ごとの業績の概要は以下のとおりであります。

		当連結会計年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)				
		第1四半期 自2018年8月 至2018年10月	第2四半期 自2018年11月 至2019年1月	第3四半期 自2019年2月 至2019年4月	第4四半期 自2019年5月 至2019年7月	年度計
売上高	(千円)	91,661	125,441	208,249	132,532	557,885
営業利益又は 営業損失 ()	(千円)	43,942	49,289	54,469	37,584	76,347

(注) 売上高には、消費税等は含まれておりません。

(5)特定の人物への依存について

当社代表取締役社長である中村達生は、当社グループの最高経営責任者であり、経営方針や事業戦略の決定、開発、サービスラインナップ、製品コンセプト等に関してリーダーシップを発揮しており、当社グループの経営活動全般において重要な役割を果たしております。そのため、各事業部門のリーダーへ権限移譲を進めることで、同氏に過度に依存しない経営体制の構築を進めておりますが、同氏に不測の事態が生じた場合には、業績に影響が生じる可能性があります。

(6)人材確保・維持について

当社グループは、人員規模が小さく、社内体制も会社規模に応じたものであります。そのため今後更なる業容拡大を図るためには、事業の中核となるコンサルタントや営業担当者に加え、当社グループ独自の技術を継承し発展させる技術者の維持と拡充が重要であると認識しております。

しかしながら、このような人材の確保・維持が出来ない場合、あるいは役員及び社員が予期せず退任又は退職した場合には、当社グループが誇るサービスレベルの維持が困難となり、組織活動が鈍化し、業容拡大の制約要因となる場合には、業績に影響が生じる可能性があります。

(7)人材の育成について

技術力を維持するため、人材の教育には時間と費用をかけて取り組んでおりますが、教育の効果が出ない可能性や教育費が固定費に占める割合が高まる可能性があり、その場合、業績に影響が生じる可能性があります。

(8)コンプライアンスの徹底について

当社グループは、会社法、税法、知的財産法、下請法、景品表示法等、さらには海外事業に係る当該国の各種法令・規制等の遵守は極めて重要な企業の責務と認識のうえ、法令遵守の徹底を図っております。しかしながら、こうした対策を行ったとしても、個人的な不正行為等を含めコンプライアンスに関するリスク並びに社会的な信用やブランド価値が毀損されるリスクを完全に回避することはできず、当該リスクが顕在した場合には、業績に影響が生じる可能性があります。

(9)海外展開について

当社グループは、米国、欧州を拠点として、海外市場に積極的に展開をしておりますが、当社グループの計画どおりに海外展開ができない場合、また、当該地域の情勢が悪化する場合や法規制等が当社グループにとって厳しくなる場合等には、業績に影響が生じる可能性があります。

(10)技術革新について

当社グループは、独自の解析技術に基づいて事業を展開しておりますが、当該分野は新技術の開発が相次いで行われ、非常に変化の激しい業界となっております。このため、当社グループは、エンジニアの採用・育成や職場環境の整備、また特にビッグデータ分析に関する技術、知見、ノウハウの取得に注力しております。しかしながら、事業展開上必要となる知見やノウハウの獲得に困難が生じた場合、また技術革新に対する当社グループの対応が遅れた場合、さらに、新技術への対応のために追加的なシステム、人件費などの支出が拡大する場合等には、業績に影響が生じる可能性があります。

(11)情報の保護について

当社グループは、業務上、顧客より提供された機密情報を取り扱う場合があるため、顧客と業務委託契約を締結し、情報管理責任者より権限を付与された担当者のみがデータにアクセスできるようにするなど、情報漏えいの防止に努めております。

しかしながら、何らかの理由で顧客の機密情報や個人情報が外部に流出した場合、当社グループへの損害賠償請求や社会的信用の失墜により、業績に影響が生じる可能性があります。

(12)内部管理体制の強化について

当社グループでは、企業価値の継続的な増大を図るにはコーポレートガバナンスが有効に機能することが必要不可欠であると認識しており、今後とも業務適正性及び財務報告の信頼性の確保のために内部管理体制の適切な運用を徹底してまいります。しかしながら、当社グループは、人員規模が小さく、社内体制も会社規模に応じたものであり、事業の急速な拡大により、内部管理体制の構築が追いつかず、コーポレートガバナンスが有効に機能しなかった場合には、適切な業務運営が困難となり、業績に影響が生じる可能性があります。

(13) プロジェクトの検収時期の変更あるいは赤字化による業績変動の可能性について

当社グループでは、顧客の検収に基づき売上高を計上しております。そのため、当社グループはプロジェクト毎の進捗を管理し、計画どおりに売上高及び利益が計上できるように努めておりますが、プロジェクトの進捗如何では、納期が変更されることもあります。この結果、検収時期の変更により売上計上時期が変動し、業績に影響が生じる可能性があります。

また、プロジェクトは、想定される工数を基に売上見積を作成し受注しております。そのため、当社グループは顧客との認識の齟齬や想定工数の乖離が生じることがないように、慎重に工数の算定をしております。しかしながら、工数の見積り時に想定されなかった不測の事態等の発生により、工数が増加すると、プロジェクトの収支が悪化する場合には、業績に影響が生じる可能性があります。

(14) 特定のベンチャーファンドについて

当社の最大株主は早稲田1号投資事業有限責任組合であり、本書提出日現在の同組合の当社の保有比率は発行済ベースで38.72%であり、同ファンドの運用期限は2019年1月31日で終了しております。

同ファンドが未公開株式に投資を行う目的は、株式公開後において所有する株式を売却することであるため、今後、市場に一時に株式が大量に流通することとなる可能性があり、株価に影響が生じる可能性があります。

但し、同ファンドは、同ファンドの運用を継続した上で当社株式を単独又は複数の長期に株式保有する方針の企業等に譲渡する方向で検討しているとのことであります。

(15) 配当政策について

当社グループは、株主に対する利益還元を重要な経営課題と認識しており、企業体質の強化と将来の事業展開のために内部留保を確保しつつ、安定的かつ継続的に業績の成長に見合った成果を配当することを基本方針としております。したがって、各期の経営成績及び財政状態を勘案しながら将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を確保しつつ、利益還元実施を検討する所存であります。現時点において配当実施の可能性及びその実施時期等については未定であります。

(16) 税務上の繰越欠損金について

当社は、現在、税務上の繰越欠損金が2019年7月時点で196,701千円存在しております。そのため、現在は通常の税率に基づく法人税、住民税及び事業税が課せられておりませんが、今後、繰越欠損金が解消された場合には、通常の税率に基づく法人税、住民税及び事業税が課せられることとなり、財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に影響が生じる可能性があります。

(17) 資金用途について

当社が2018年10月30日に公募増資により調達した資金の用途については、子会社の増資、アルゴリズム研究体制の構築等、ASP機能改善、クラウドサーバ費用、採用経費、会計システム投資、本社拡張投資及び広告宣伝費に充当しておりますが、想定した投資効果を上げられず、業績に影響が生じる可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度における我が国の景気は、このところ輸出を中心に弱さが続いているものの、緩やかに回復しております。個人消費も、持ち直しており、設備投資は、このところ機械投資に弱さもみられますが、緩やかな増加傾向にあります。また、企業収益は、高い水準で底堅く推移しており、企業の業況判断は、製造業を中心に慎重さが増しております。

IDC Japan株式会社の発表（2019年7月10日）によると、国内BDA（Big Data and Analytics）ソフトウェア市場における2018年実績は、前年比9.6%増の高い成長率を記録し、市場規模は2,778億7,500万円となりました。また、同じく、同社の2019～2023年の予測によると、企業のデジタルトランスフォーメーション（DX）やそれに伴うアナリティクス及びAI活用の取り組みは一層の広がりを見せ、年間平均成長率（CAGR:Compound Annual Growth Rate）は8.5%になると予測しており、国内BDA（Big Data and Analytics）ソフトウェア市場は、市場規模、成長性ともに有望視されます。

当連結会計年度は、昨年度に引き続き、国内及び海外におけるASPサービスとそれにもとづくコンサルティングサービスのさらなる販売拡大活動をしてまいりました。

また、採用活動も退職者の補充も含めて順調に推移しており、21名（うち営業10名）を採用いたしました。

これらの結果、当連結会計年度における売上高は557,885千円（前年同期比9.9%増）、営業損失は76,347千円（前年同期は営業利益77,007千円）、経常損失は92,044千円（前年同期は経常利益77,851千円）、親会社株主に帰属する当期純損失は108,068千円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益83,726千円）となりました。

なお、当社グループはアルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント情報の記載を省略しております。以上の結果、当連結会計年度の財政状態及び経営成績は以下の通りとなりました。

(a) 財政状態

当連結会計年度末における総資産の残高は、前連結会計年度末に比べ652,300千円増加し、1,077,283千円となりました。

当連結会計年度末における総負債の残高は、前連結会計年度末に比べ80,010千円減少し、137,882千円となりました。

当連結会計年度末における純資産の残高は、前連結会計年度末に比べ732,311千円増加し、939,400千円となりました。

(b) 経営成績

当連結会計年度における売上高は557,885千円（前年同期比9.9%増）、営業損失は76,347千円（前年同期は営業利益77,007千円）、経常損失は92,044千円（前年同期は経常利益77,851千円）、親会社株主に帰属する当期純損失は108,068千円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益83,726千円）となりました。

なお、当社グループはアルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント情報の記載を省略しております。

主なサービス別の状況は以下のとおりであります。

()ASPサービス

当連結会計年度におけるASPサービスの売上高は、218,601千円（前年同期比35.3%増）でありました。

()コンサルティングサービス

当連結会計年度におけるコンサルティングサービスの売上高は、339,201千円（前年同期比2.0%減）でありました。

キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末と比べて647,092千円増加し、958,089千円となりました。当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次の通りであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度において営業活動の結果、使用した資金は87,363千円となりました。（前連結会計年度は78,170千円の収入）これは主に上場関連費用15,033千円、売上債権の増加7,342千円、税金等調整前当期純損失92,044千円の計上によるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度において投資活動の結果、使用した資金は11,159千円になりました。(前連結会計年度は352千円の支出)これは有形固定資産の取得による支出2,169千円、敷金及び保証金の差入による支出8,989千円でありま

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

当連結会計年度における財務活動の結果、得られた資金は749,430千円となりました。(前連結会計年度は35,569千円の収入)これは主に株式の発行による収入830,188千円及び短期借入の返済による支出80,000千円によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

(a) 生産実績

当社グループは、生産活動を行っておりませんので、該当事項はありません。

(b) 受注実績

当連結会計年度の受注実績をサービスごとに示すと、次のとおりであります。

サービスの名称	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)			
	受注高(千円)	前年同期比(%)	受注残高(千円)	前年同期比(%)
ASP	233,739	118.5	117,542	114.8
コンサルティング	342,968	105.1	46,999	108.7
レポート販売	81	81.9	-	-
合計	576,789	110.2	164,542	113.0

(注) 1. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

2. 当社グループは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、サービスごとに記載しております。

(c) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をサービスごとに示すと、次のとおりであります。

サービスの名称	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)	
	金額(千円)	前年同期比(%)
ASP	218,601	135.3
コンサルティング	339,176	98.0
レポート販売	81	82.2
合計	557,885	109.9

(注) 1. 当社グループは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、サービスごとに記載しております。

2. サービス間の取引はありません。

3. 売上高の10%を超える主な相手先が存在しないため、「最近2連結会計年度の10%を超える主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合」の記載を省略しております。

4. 上記の金額には、消費税等は含まれておりません。

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次の通りであります。

文中の将来に関する事項は、本書提出日現在において判断したものであります。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。

連結財務諸表の作成に当たり、資産及び負債又は損益の状況に影響を与える会計上の見積りは、過去の実績等連結財務諸表作成時に入手可能な情報に基づき合理的に判断しておりますが、実際の結果は見積り特有の不確実性があるため、これらの見積りと異なる場合があります。

当社グループの連結財務諸表の作成に当たって採用している重要な会計方針は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

(a) 経営成績等

() 財政状態

(資産)

当連結会計年度末における流動資産の残高は1,040,828千円となり前連結会計年度末に比べ658,755千円増加いたしました。これは主に現金及び預金が647,092千円増加及び売掛金が6,799千円増加したことによるものであります。

当連結会計年度末における固定資産の残高は、前連結会計年度末に比べ6,454千円減少し、36,455千円となりました。この主な原因は投資その他の資産が4,931千円、減価償却に伴い有形固定資産が1,084千円、無形固定資産が438千円減少したことによるものであります。

この結果、総資産の残高は、前連結会計年度末に比べ652,300千円増加し、1,077,283千円となりました。

(負債)

当連結会計年度末における流動負債の残高は136,746千円となり前連結会計年度末に比べ79,252千円減少いたしました。この主な原因は短期借入金返済により80,000千円、前受金が5,824千円減少したことによるものであります。

当連結会計年度末における固定負債の残高は、前連結会計年度末に比べ757千円減少し、1,136千円となりました。これはリース債務が757千円減少したことによるものであります。

この結果、総負債の残高は、前連結会計年度末に比べ80,010千円減少し、137,882千円となりました。

(純資産)

当連結会計年度末における純資産の残高は939,400千円となり前連結会計年度末に比べ732,311千円の増加いたしました。主な内訳は、資本金の増加422,895千円、資本剰余金の増加422,895千円、利益剰余金の減少108,068千円です。

() 経営成績の分析

(売上高)

当連結会計年度の売上高は前連結会計年度に比べ50,140千円増加し、557,885千円(前年同期比9.9%増)となりました。この主な要因は、国内におけるTechRadar®とDocRadar®のさらなる販売拡大によるものであります。

(売上原価、売上総利益)

当連結会計年度の売上原価は前連結会計年度に比べ18,959千円増加し119,033千円(同18.9%増)、売上総利益は、438,851千円(前年同期比7.6%増)となりました。これは主にコンサルティング原価53,459千円、システム管理費36,792千円、サーバ管理費23,838千円の計上によるものであります。

(販売費及び一般管理費、営業損益)

当連結会計年度の販売費及び一般管理費は前連結会計年度に比べ184,536千円増加し515,198千円(同55.8%増)、営業損失は76,347千円(前年同期は営業利益77,007千円)となりました。これは主に増員による給料及び手当148,158千円、業務委託費60,971千円の計上によるものであります。

(営業外損益、経常損益)

当連結会計年度の営業外損益は、主として助成金570千円の発生により営業外収益が693千円、また、上場関連費用15,033千円の発生、為替差損981千円の発生により営業外費用が16,390千円となりました。この結果、経常損失は92,044千円(前年同期は経常利益77,851千円)となりました。

(特別損益、親会社株主に帰属する当期純損益)

当連結会計年度の法人税等合計は、法人税、住民税及び事業税の計上2,344千円、法人税等調整額の計上13,679千円により16,024千円となりました。この結果、当連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純損失108,068千円(前年同期は親会社株主に帰属する当期純利益83,726千円)となりました。

() キャッシュ・フローの状況

キャッシュ・フローの状況の分析につきましては、「(1) 経営成績等の状況の概要 キャッシュ・フローの状況」に記載のとおりであります。

(b) 経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因につきましては、「2 事業等のリスク」に記載のとおりであります。

(c) 資本の財源及び資金の流動性

当社のグループの事業活動における運転資金需要の主なものは、人件費、業務委託費、システム管理費等であります。なお、重要な資本的支出については、「第3 設備の状況」の「3 設備の新設、除却等の計画」に記載のとおり、事務所増床を計画しておりますが、自己資金で対応する予定であります。当社グループは、事業運営上必要な流動性と資金の源泉を安定的に確保することを基本方針としております。短期運転資金は自己資金及び金融機関からの短期借入を基本としております。

なお、当連結会計年度末における借入金及びリース債務を含む有利子負債の残高は1,893千円となっております。また、当連結会計年度末における現金及び現金同等物の残高は958,089千円となっております

(d) 経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループの経営方針・経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等につきましては、「第2 事業の状況 1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 (3) 経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等」に記載のとおりであります。

4 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

5 【研究開発活動】

該当事項はありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度における設備投資の総額は2,169千円であり、主な目的は作業効率の向上です。内容といたしましては工具、器具及び備品に1,829千円となっております。

また、当社グループの事業セグメントは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載はしていません。

なお、当連結会計年度において、重要な設備の除却・売却等はありません。

2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

2019年7月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
		建物 (千円)	工具、器具 及び備品 (千円)	リース資産 (千円)	ソフトウェア (千円)	合計 (千円)	
本社 (東京都文京区)	サーバ等	10,409	2,486	1,690	76	14,662	25(8)

(注) 1. 現在休止中の主要な設備はありません。

2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

3. 本社建物は賃借しております。年間賃借料は20,227千円であります。

4. 従業員数の()は、常勤の臨時雇用者数(アルバイトを含む)を外書しております。

5. 当社グループの事業セグメントは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載は省略しております。

(2) 在外子会社

重要性がないため、記載は省略しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

2019年7月31日現在

会社名 事業所名	所在地	設備の内容	投資予定金額		資金 調達 方法	着手及び完了予定年月		完成後の 増加能力
			総額 (千円)	既支払額 (千円)		着手	完了	
VALUENEX株 式会社(本社)	東京都 文京区	事務所増床に伴う 設備	55,000	-	自己資金	2019年4月	2019年8月	(注)3.

(注) 1. 金額には消費税等は含まれておりません。

2. 当社グループの事業セグメントは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、セグメント別の記載は省略しております。

3. 完成後の増加能力については、計数的把握が困難であるため、記載を省略しております。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	3,600,000
計	3,600,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2019年7月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年10月28日)	上場金融商品取引所名又は登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	2,856,300	2,872,800	東京証券取引所 (マザーズ)	完全議決権株式であり、権利内容に何ら限定のない当社における標準となる株式であり、単元株式数は100株であります。
計	2,856,300	2,872,800	-	-

(注)「提出日現在発行数」欄には、2019年10月1日からこの有価証券報告書提出日までの新株予約権の行使により発行された株式数は含まれておりません。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

会社法に基づき発行した新株予約権は、次のとおりであります。

2015年7月31日臨時株主総会決議(2015年7月31日取締役会決議：第3回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2015年7月31日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 1 監査役 1	同左
新株予約権の数(個)	20(注)1	20(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	6,000(注)1、5	6,000(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	100(注)2、5	100(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2017年8月1日 至 2025年7月31日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 100 資本組入額 50(注)5	発行価格 100 資本組入額 50(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	新株予約権を譲渡し、又は、新株予約権に担保設定してはならない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

調整後株式数 = 調整前株式数 × 分割・併合の比率

(注) 2 . 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が時価を下回る価額で募集株式を発行（株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権（新株予約権付社債も含む）の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く）する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

(注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の取締役、監査役もしくは従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、任期満了による退任、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。

(注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。

(注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2016年2月23日臨時株主総会決議(2016年2月23日取締役会決議：第4回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2016年2月23日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	社外協力者 1	同左
新株予約権の数(個)	14(注)1	14(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	4,200(注)1、5	4,200(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	120(注)2、5	120(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2018年2月24日 至 2026年2月23日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 120 資本組入額 60(注)5	発行価格 120 資本組入額 60(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	新株予約権を譲渡し、又は、新株予約権に担保設定してはならない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注) 1 . 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。
ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

$$\text{調整後株式数} = \text{調整前株式数} \times \text{分割・併合の比率}$$

(注) 2 . 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が時価を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる

証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times \text{1株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の社外協力者であることを要する。ただし、正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。
- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。
- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2016年3月2日臨時株主総会決議(2016年3月2日取締役会決議：第5回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2016年3月2日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 4 監査役 3 使用人 8	同左
新株予約権の数(個)	20(注)1	20(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	6,000(注)1、5	6,000(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	120(注)2、5	120(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2018年3月3日 至 2026年3月2日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 120 資本組入額 60(注)5	発行価格 120 資本組入額 60(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切 の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

調整後株式数 = 調整前株式数 × 分割・併合の比率

(注)2. 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり36,000円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

(注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の取締役、監査役もしくは従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、任期満了による退任、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。

(注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。

(注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2016年3月2日臨時株主総会決議(2016年6月10日取締役会決議：第6回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2016年6月10日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	使用人 3	同左
新株予約権の数(個)	2(注)1	2(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	600(注)1、5	600(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	120(注)2、5	120(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2018年6月11日 至 2026年3月2日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 120 資本組入額 60(注)5	発行価格 120 資本組入額 60(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注) 1 . 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

調整後株式数 = 調整前株式数 × 分割・併合の比率

(注) 2 . 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり36,000円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社普通株式

に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times \text{1株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の取締役、監査役もしくは従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、任期満了による退任、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。
- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。
- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2017年1月24日臨時株主総会決議(2017年2月10日取締役会決議：第7回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2017年2月10日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 1 使用人 6 子会社取締役 1	同左
新株予約権の数(個)	47(注)1	47(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	14,100(注)1、5	14,100(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	417(注)2、5	417(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2019年2月11日 至 2027年1月23日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 417 資本組入額 209(注)5	発行価格 417 資本組入額 209(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

調整後株式数 = 調整前株式数 × 分割・併合の比率

(注)2. 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり125,000円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の取締役、監査役もしくは従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、任期満了による退任、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。
- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。
- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2017年10月26日定時株主総会決議(2017年10月26日取締役会決議：第9回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2017年10月26日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	使用人 3	使用人 1
新株予約権の数(個)	2(注)1	2(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	600(注)1、5	600(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	417(注)2、5	417(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2019年10月27日 至 2027年10月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 417 資本組入額 209(注)5	発行価格 417 資本組入額 209(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

$$\text{調整後株式数} = \text{調整前株式数} \times \text{分割・併合の比率}$$

(注)2. 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり125,000円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。
- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。
- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2017年10月26日定時株主総会決議(2018年1月12日取締役会決議：第10回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2018年1月12日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	使用人 3	同左
新株予約権の数(個)	2(注)1	2(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	600(注)1、5	600(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	417(注)2、5	417(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2020年1月15日 至 2027年10月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 417 資本組入額 209(注)5	発行価格 417 資本組入額 209(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

$$\text{調整後株式数} = \text{調整前株式数} \times \text{分割・併合の比率}$$

(注)2. 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり125,000円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という)は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。

- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。

- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2017年10月26日定時株主総会決議(2018年3月9日取締役会決議：第11回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2018年3月9日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	使用人 3	同左
新株予約権の数(個)	4(注)1	4(注)1
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	1,200(注)1、5	1,200(注)1、5
新株予約権の行使時の払込金額(円)	417(注)2、5	417(注)2、5
新株予約権の行使期間	自 2020年3月12日 至 2027年10月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 417 資本組入額 209(注)5	発行価格 417 資本組入額 209(注)5
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

- (注) 1 . 新株予約権1個につき目的となる株式数は、1株であります。
ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

$$\text{調整後株式数} = \text{調整前株式数} \times \text{分割・併合の比率}$$

- (注) 2 . 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり125,000円を下回る価額で募集株式を発行（株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権（新株予約権付社債も含む）の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く）する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times \text{1株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者（以下、「新株予約権者」という）は、権利行使時においても、当社又は当社の子会社の従業員の地位にあることを要するものとする。ただし、定年退職、会社都合による退任・退職、業務上の疾病に起因する退職、及び転籍その他正当な理由の存する場合については、取締役会において定めるものとする。
 新株予約権者が死亡した場合は、新株予約権の相続はこれを認めない。
 その他の条件については、株主総会決議及び新株予約権発行の取締役会決議に基づき、別途当社と新株予約権者との間で締結する「新株予約権割当契約書」に定めるところによる。

- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。

- (注) 5 . 2018年3月9日開催の取締役会決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。これにより「新株予約権の目的となる株式の数」、「新株予約権の行使時の払込金額」及び「新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額」が調整されております。

2018年7月3日臨時株主総会決議(2018年7月3日取締役会決議：第12回新株予約権)

区分	事業年度末現在 (2019年7月31日)	提出日の前月末現在 (2019年9月30日)
決議年月日	2018年7月3日	同左
付与対象者の区分及び人数(名)	取締役 2 子会社取締役 1	同左
新株予約権の数(個)	1,915	1,750
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)	191,500(注)1	175,000(注)1
新株予約権の行使時の払込金額(円)	605(注)2	605(注)2
新株予約権の行使期間	自 2018年7月10日 至 2028年7月9日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	発行価格 622 資本組入額 311	発行価格 622 資本組入額 311
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	譲渡、質入その他の一切の処分を認めない。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	(注)4	同左

(注)1. 新株予約権1個につき目的となる株式数は、100株であります。

ただし、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当等を行う場合、次の算式により目的となる株式の数を調整するものとする。ただし、かかる調整は本新株予約権のうち、当該時点で権利行使していない新株予約権の目的となる株式の数についてのみ行われ、調整の結果1株未満の端数が生じた場合は、これを切り捨てるものとする。

調整後株式数 = 調整前株式数 × 分割・併合の比率

(注)2. 新株予約権の割当後、当社が株式分割、株式併合又は株式無償割当を行う場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{1}{\text{分割・併合の比率}}$$

また、当社が1株あたり605円を下回る価額で募集株式を発行(株式の無償割当による株式の発行及び自己株式を交付する場合を含み、新株予約権(新株予約権付社債も含む)の行使による場合及び当社の普通株式に転換できる証券の転換による場合を除く)する場合は、次の算式により、払込金額を調整し、調整により生ずる1円未満の端数は切り上げる。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{新規発行株式数} \times 1 \text{株当たり払込金額}}{\text{調整前行使価額}}}{\text{既発行株式数} + \text{新規発行株式数}}$$

ただし、算式中の既発行株式数は、上記の株式の発行の効力発生日の前日における当社の発行済株式総数から、当該時点における当社の保有する自己株式の数を控除した数とし、自己株式の処分を行う場合、新規発行株式数を処分する自己株式の数に読み替えるものとする。

- (注) 3 . 新株予約権の割当を受けた者(以下、「新株予約権者」という。)は、新株予約権の割当日から行使期間の満了日までにおいて次に掲げる各事由が生じた場合には、新株予約権者は残存する全ての本新株予約権を行使することができない。
- (a) (注) 2 . において定められた行使価額を下回る価格を対価とする当社普通株式の発行等が行われた場合(払込金額が会社法第199条第3項・同第200条第2項に定める「特に有利な金額である場合」、株主割当てによる場合その他普通株式の株式価値とは異なると思われる価格で行われる場合を除く。)。
 - (b) 本新株予約権の目的である当社普通株式が日本国内のいずれかの金融商品取引所にも上場されていない場合、(注) 2 . において定められた行使価額を下回る価格を対価とする売買その他の取引が行われたとき(但し、資本政策目的等により当該取引時点における株式価値よりも著しく低いと認められる価格で取引が行われた場合を除く。)。
 - (c) 本新株予約権の目的である当社普通株式が日本国内のいずれかの金融商品取引所に上場された場合、当該金融商品取引所における当社普通株式の普通取引の終値が、(注) 2 . において定められた行使価額を下回る価格となったとき。
 - (d) 本新株予約権の目的である当社普通株式が日本国内のいずれかの金融商品取引所にも上場されていない場合、第三者評価機関等によるDCF法ならびに類似会社比較法等の方法による評価された株式評価額が(注) 2 . において定められた行使価額を下回ったとき(但し、株式評価額が一定の幅をもって示された場合、当社の取締役会が第三者評価機関等と協議の上本項への該当を判断するものとする。)。
- 新株予約権者は、新株予約権の権利行使時においても、当社又は当社関係会社の取締役、監査役又は従業員であることを要する。ただし、任期満了による退任、定年退職、その他正当な理由があると取締役会が認めた場合は、この限りではない。
- 新株予約権者の相続人による本新株予約権の行使は認めない。
- 本新株予約権の行使によって、当社の発行済株式総数が当該時点における発行可能株式総数を超過することとなるときは、当該本新株予約権の行使を行うことはできない。
- 各本新株予約権1個未満の行使を行うことはできない。

- (注) 4 . 当社が他社と吸収合併もしくは新設合併を行い新株予約権が承継される場合又は当社が完全子会社となる株式交換もしくは株式移転を行い新株予約権が承継される場合、当社は、合併比率等に応じ必要と認める株式数の調整を行うことができる。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総数 増減数(株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
2015年3月28日 (注)1	-	7,754	145,210	100,000	231,210	-
2018年3月28日 (注)2	2,318,446	2,326,200	-	100,000	-	-
2018年10月29日 (注)3	420,000	2,746,200	355,488	455,488	355,488	355,488
2018年11月26日 (注)4	66,700	2,812,900	56,454	511,942	56,454	411,942
2018年8月1日～ 2019年7月31日 (注)5	43,400	2,856,300	10,952	522,895	10,952	422,895

(注)1. 資本金の減少は減資によるものであり、資本準備金の減少は欠損てん補によるものであります。その他資本剰余金376,420千円を処分し、欠損となっているその他利益剰余金へ振り替えたものであります。

2. 株式分割(1:300)によるものであります。

3. 有償一般募集(ブックビルディング方式による募集)

発行価格 1,840円

引受価額 1,692.8円

資本組入額 846.4円

4. 有償第三者割当(オーバーアロットメントによる売出しに関連した第三者割当増資)

割当価格 1,692.8円

資本組入額 846.4円

割当先 株式会社SBI証券

5. 新株予約権の行使による増加であります。

6. 2019年8月1日から2019年9月30日までの間に、新株予約権の行使により、発行済み株式総数が16,500株、資本金及び資本準備金がそれぞれ5,131千円増加しております。

(5) 【所有者別状況】

2019年7月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況 (株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	5	20	15	13	6	1,464	1,523	-
所有株式数 (単元)	-	2,566	360	1,343	377	71	23,839	28,556	700
所有株式数の割合(%)	-	8.99	1.26	4.70	1.32	0.25	83.48	100	-

(注)自己株式54,000株は、「個人その他」に540単元含まれております。

(6)【大株主の状況】

2019年7月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己 株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
早稲田1号投資事業有限責任組合	東京都新宿区喜久井町65 糟屋ビル3階	1,106	39.47
中村 達生	埼玉県所沢市	661	23.58
日本トラスティ・サービス信託銀行 株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-11	181	6.46
ウエルインベストメント株式会社	東京都新宿区喜久井町65 糟屋ビル3階	125	4.46
工藤 郁哉	埼玉県さいたま市見沼区	50	1.79
日本マスタートラスト信託銀行株式 会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	50	1.79
平澤 創	京都府京都市左京区	50	1.78
長谷川 智彦	東京都港区	30	1.07
BANQUE PICTET AN D CIE SA (常任代理人株式会社三菱UFJ銀 行)	ROUTE DES ACACIAS 60, 1211 GENEVA 7 3, SWITZERLAND (東京都千代田区丸の内2丁目7番1号 決済事業部)	16	0.58
資産管理サービス信託銀行株式 会社(証券投資信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-12 晴海 トリトンスクエアタワーZ	15	0.54
計	-	2,285	81.53

(注)1. 上記の所有株式数のうち、信託業務にかかる株式数は、次のとおりであります。

日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	180,900株
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	33,600株
管理資産サービス信託銀行株式会社(証券投資信託口)	15,000株

2. 2019年5月22日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書において、みずほ証券株式会社及びアセットマネジメント One株式会社が2019年5月15日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当社として2019年7月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況には含めておりません。

なお、その大量保有報告書の内容は次のとおりであります。

大量保有者

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (株)	株券等保有割合 (%)
みずほ証券株式会社	東京都千代田区大手町1丁目5番1号	株式 8,500	0.30
アセットマネジメント One株式会社	東京都千代田区丸の内1丁目8番2号	株式 142,000	4.97

(7)【議決権の状況】
【発行済株式】

2019年7月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 54,000	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 2,801,600	28,016	-
単元未満株式	普通株式 700	-	-
発行済株式総数	2,856,300	-	-
総株主の議決権	-	28,016	-

【自己株式等】

2019年7月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有株 式数(株)	他人名義所有株 式数(株)	所有株式数の合 計(株)	発行済株式総数に対 する所有株式数の割 合(%)
VALUENEX 株式会社	東京都文京区小日向 四丁目5番16号	54,000	-	54,000	1.89
計	-	54,000	-	54,000	1.89

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 普通株式

- (1)【株主総会決議による取得の状況】
 該当事項はありません。
- (2)【取締役会決議による取得の状況】
 該当事項はありません。
- (3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】
 該当事項はありません。
- (4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他 ()				
保有自己株式数	54,000			

3【配当政策】

当社グループは、株主に対する利益還元を重要な経営課題と認識しており、企業体質の強化と将来の事業展開のために内部留保を確保しつつ、安定的かつ継続的に業績の成長に見合った成果を配当することを基本方針としております。したがって、各期の経営成績及び財政状態を勘案しながら将来の事業展開と経営体質の強化のために必要な内部留保を確保しつつ、利益還元実施を検討する所存ではありますが、現時点において配当実施の可能性及びその実施時期等については未定であります。

なお、当社は、剰余金の配当を行う場合には、期末配当の年1回を基本的な方針としておりますが、会社法第454条第5項に規定する中間配当ができる旨を定款に定めております。配当の決定機関は中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社のコーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方は、企業としての社会的責任を自覚し、持続的に企業価値を高めていくことを基本とし、経営機構における監督機能を強化するとともに、透明性、適法性を確保しつつ、迅速な業務執行体制の確立を図っております。

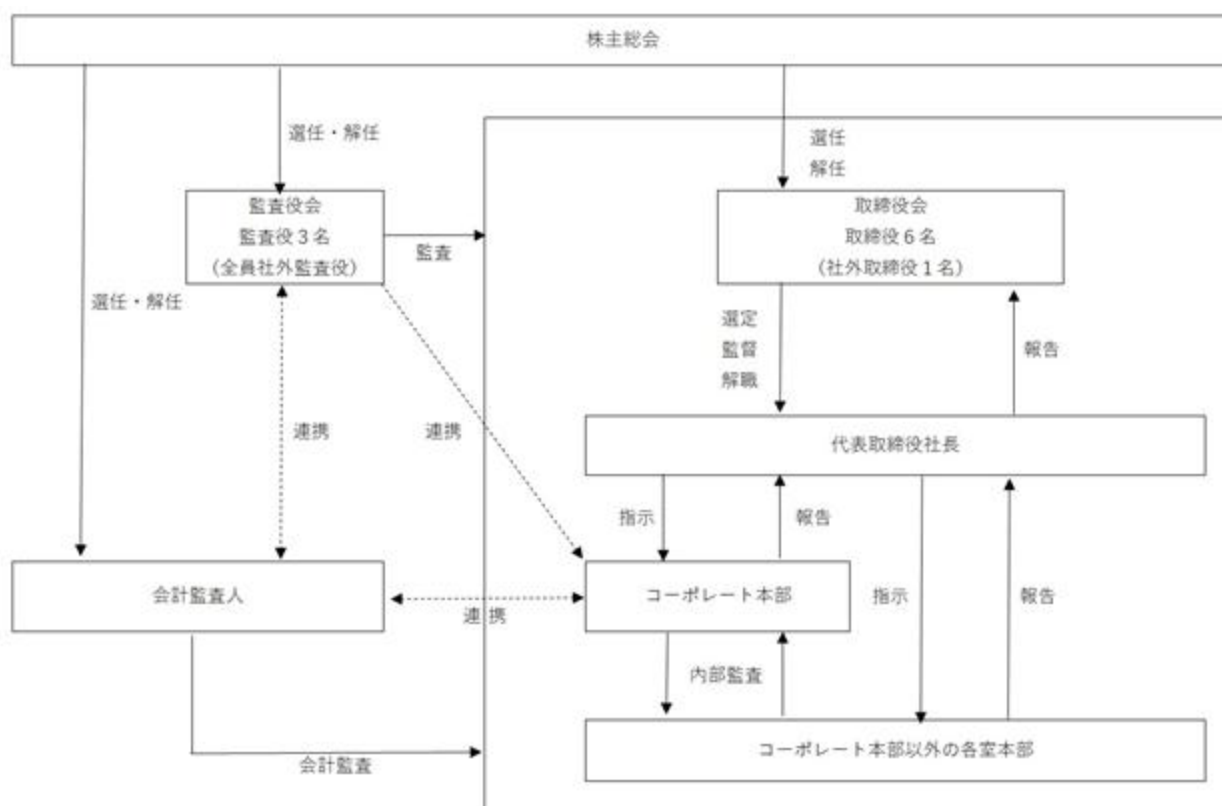
コーポレート・ガバナンスについての重点課題としては、「経営者が、企業の目的・経営理念を明確にし、それに照らした適切な態度・行動をとる姿勢を広く社会に明示・伝達すること」、「ステークホルダーとの円滑な関係を構築すること」、「適時適切な情報開示ができること」、「取締役会・監査役会等による経営の監督を充実させ、株主に対する説明責任を果たせること」、「経営者として企業を規律するために、内部統制の充実が図られていること」を意識しており、これらの重点課題を中心に体制整備を行っております。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

イ．企業統治体制の概要

当社は、監査役会制度を採用し、社外取締役を含む取締役会が経営を監督する機能を担い、社外監査役を含む監査役会が取締役会を牽制する体制としております。

当社のコーポレート・ガバナンスの体制の概要は以下のとおりであります。



ロ．当該体制を採用する理由

経営を監督する取締役会を監査役会が牽制する体制とすることで適正なコーポレート・ガバナンスを確保できるものと判断し、当該体制を採用しております。

ハ．各機関の内容

a. 取締役会

取締役会は、6名（有価証券報告書提出日現在、うち社外取締役1名）の取締役で構成され、監査役出席のもと、原則毎月1回開催し、当社の重要な業務執行を決定し、取締役の職務の遂行を監督しております。

（取締役会構成員の氏名等）

議長：代表取締役社長 中村達生

構成員：取締役 鮫島正明 ・ 取締役 本多克也 ・ 取締役 片桐広貴 ・ 取締役 Michael Samuel Kovach ・ 取締役 鈴木理晶（社外取締役）

b. 監査役会

監査役会は、社外監査役3名（有価証券報告書提出日現在、うち常勤監査役1名、非常勤監査役2名）で構成され、監査役会を原則3ヶ月に1回以上開催し、監査の方針、監査の方法、監査業務の執行に関する事項の決定を行っております。

（監査役会構成員の氏名等）

議長：監査役（常勤監査役） 松田均

構成員：監査役（非常勤監査役） 花堂靖仁 ・ 監査役（非常勤監査役） 宮内宏

なお、監査役監査の状況や個々の監査役の監査役会への出席状況については「（3）監査の状況 監査役監査の状況」に記載しております。

c. 部長会

部長会は、代表取締役・取締役・執行役員及び各本部長以上の責任者、子会社取締役等で構成され、営業体制の強化、リスク状況の把握、新商品の開発など、経営全般について迅速な意思決定を行うために、必要に応じて開催しております。部長会は、職務権限上の意思決定機関ではありませんが、各部門の情報共有と意見交換の場として活発な議論を交換しております。なお、重要な業務の執行については取締役会に上程しております。

d. コーポレート本部

当社は、コーポレート本部に内部監査機能を保持させております。内部監査担当者は、業務の有効性及び効率性等を担保することを目的として、代表取締役社長による承認を得た内部監査計画に基づいて内部監査を実施し、監査結果を代表取締役社長に報告するとともに、監査対象となった被監査部門に対して業務改善等のために指摘を行い、後日、改善状況を確認します。内部監査担当者は、監査役及び会計監査人と定期的に会合を開催しており、監査に必要な情報の共有を行い、相互に連携を図っております。

なお、自己監査を回避するため、コーポレート本部の内部監査については、他の本部がコーポレート本部の内部監査を行うことで自己監査を回避しております。

企業統治に関するその他の事項

イ. 内部統制システムの整備の状況

a. 基本方針

当社は業務の適正性を確保するための体制として、「内部統制システムの整備に関する基本方針」を定めており、その基本方針に基づき内部統制システムの運用を行っております。その概要は以下のとおりであります。

.取締役、使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ・コンプライアンス体制の基礎として、取締役及び使用人が遵守すべき規範である「コンプライアンス規程」を定めて周知徹底し、高い倫理観にもとづいて行動する企業風土を醸成し、堅持する。
- ・コンプライアンス体制の構築・維持は、管理担当部門の部門長を実施責任統括者として任命し取り組む。
- ・「取締役会規程」をはじめとする社内規程を制定、必要に応じて改定し、業務の標準化及び経営秩序の維持を図る。
- ・役職員の職務執行の適正性を確保するため、内部監査担当部署を設置し、「内部監査規程」に基づき内部監査を実施する。また、内部監査担当部署の責任者は、必要に応じて監査役及び会計監査人と情報交換し、効率的な内部監査を実施する。

.取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- ・株主総会、取締役会、その他重要な意思決定に係る情報は、管理担当部門が法令及び社内規程等に基づき、所定の年数保管・管理する。
- ・文書管理部署は、取締役及び監査役の閲覧請求に対して速やかに対応する。

.損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ・当社の業務執行に係るリスクに関して、各部門においてそれぞれ予見されるリスクの分析と識別を行い、全社のリスクを網羅的・総括的に管理する。
- ・当社の経営に重大な影響を与えるような経営危機が発生した場合は、代表取締役社長又は取締役を責任者とし、当社の損失を最小限に抑えるとともに早期の原状回復に努める。

.取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ・定例の取締役会を毎月1回開催する他、機動的に意思決定を行うため、必要に応じて臨時の取締役会を開催するものとし、適切な職務執行が行える体制を確保する。
- ・職務執行に関する権限及び責任は、「組織関連規程」等において明文化し、適宜適切に見直しを行う。
- ・業務管理については、事業計画を定め、会社として達成すべき目標を明確化し、さらに各部門に対し、業績への責任を明確にするとともに、業務効率の向上を図る。

.当社並びにその子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

- ・子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制を整備するため、重要な経営情報の当社への定期的な報告に関する規程を定めるほか、当社の経営陣が子会社の経営状況について直接報告を受ける会議を定期的開催する。
- ・子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制を整備するため、子会社に対し、事業形態や経営環境を踏まえたリスクマネジメント体制の構築を指導し、活動状況について定期的な報告を受ける。
- ・子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制を整備するため、業務執行に関して、当社が決定権限を留保する範囲を規程により定める。また、子会社を所管する本部等を定めることで、経営情報の一元的な把握を図るとともに、子会社が必要とする支援・指導を行う。
- ・子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制を整備するため、子会社の取締役等及び使用人による内部通報について、状況が適切に当社に報告される体制を整備することを指導する。
- ・監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項及びその使用人の取締役からの独立性に関する事項
 - ・監査役が職務遂行について補助すべき使用人を求めた場合、必要な人員を配置し、当該人員の取締役からの独立性を確保するため、当該人員の人事異動及び人事評価等については監査役の意見を考慮して行う。
- ・取締役及び使用人が監査役に報告するための体制その他監査役への報告に関する体制
 - ・取締役及び使用人は、監査役から事業の報告を求められた場合は、速やかに報告する。
 - ・取締役及び使用人は、会社に重大な損失を与える事項が発生し、又は発生するおそれがあるとき、取締役による違法、又は不正な行為を発見したときは、直ちに監査役に報告する。
 - ・代表取締役は、取締役会などの重要会議での議論及び定期的な面談等を通じて、監査役との相互認識と信頼関係を深めるように努め、監査役監査の環境整備に必要な措置をとる。
- ・その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - ・取締役は、監査役が取締役会その他重要な意思決定の過程及び業務の執行状況を把握するため、重要な会議に出席できる環境を整備するとともに、内部監査担当部署、会計監査人及び外部の専門家等と必要に応じて連携できる環境を構築する。
- ・財務報告の信頼性を確保するための体制
 - ・当社は、財務報告の信頼性を確保するため、代表取締役社長の指示のもと、金融商品取引法に基づく内部統制が有効に行われる体制を構築し、内部統制システムの整備及び運用を行うとともに、その仕組みが適正に機能することを継続的に評価し、必要な是正を行う。
- ・反社会的勢力との取引排除に向けた基本的考え方及びその整備状況
 - ・当社の「反社会的勢力対策規程」において、反社会的勢力との取引を含めた一切の関係を遮断することを定め、役員及び使用人の平素からの対応や事案発生時の組織対応制度を構築する。さらに社団法人警視庁管内特殊暴力防止対策連合会、弁護士等の外部の専門機関と緊密な連携関係を構築するとともに、新規取引の際は、契約書等に反社会的勢力排除条項を盛り込む。

ロ．リスク管理体制の整備の状況

当社は、リスク管理体制を構築し、コンプライアンスの遵守を実現するために、全社組織や業務に係る各種規程を整備し、その適正な運用を行ってまいりました。特に内部牽制が組織全体にわたって機能するよう、社内規程、マニュアルに沿った運用の徹底に力を注いでおります。

経営を取り巻く各種リスクについては、代表取締役社長を中心として、各部門責任者のモニタリングによって行っており、特に重要なリスク管理は取締役会にて報告され、取締役、監査役による協議を行っております。

また、社内の役員及び社外の専門家を通報窓口とする内部通報制度を制定しております。組織的又は個人的な法令違反ないし不正行為に関する通報等について、適正な処理の仕組みを定めることにより、不正行為等による不祥事の防止及び早期発見を図っております。

なお、法令遵守体制の構築及び実践を目的として「コンプライアンス規程」を定め、役員及び従業員の法令遵守を義務付けております。

八．子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は子会社の業務の適性を確保する為、以下の体制を構築しております。

- ・子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当社への報告に関する体制を整備するため、重要な経営情報の当社への定期的な報告に関する規程を定めるほか、当社の経営陣が子会社の経営状況について直接報告を受ける会議を定期的開催する。
- ・子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制を整備するため、子会社に対し、事業形態や経営環境を踏まえたりスクマネジメント体制の構築を指導し、活動状況について定期的な報告を受ける。
- ・子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制を整備するため、業務執行に関して、当社が決定権限を留保する範囲を規程により定める。また、子会社を所管する本部等を定めることで、経営情報の一元的な把握を図るとともに、子会社が必要とする支援・指導を行う。
- ・子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制を整備するため、子会社の取締役等及び使用人による内部通報について、状況が適切に当社に報告される体制を整備することを指導する。

責任限定契約の内容の概要

当社と社外取締役又は社外監査役は、会社法第427条第1項の規定に基づき、同法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、当該社外取締役又は社外監査役が責任の原因となった職務の遂行について善意でかつ重大な過失がないときは、年額報酬の2年分の合計金額又は会社法第425条第1項で定める最低責任限度額とのいずれか高い金額としております。

取締役の定数

当社の取締役は10名以内とする旨を定款に定めております。

．取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は累積投票によらない旨を定款で定めております。

．取締役会で決議できる株主総会決議事項

a. 自己株式の取得

当社は、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を可能とするため、自己株式の取得について、会社法第165条第2項の規定により、取締役会決議によって市場取引等により自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。

b. 中間配当の決定機関

当社は、株主への機動的な利益還元を可能とするため、取締役会の決議によって、毎年1月31日を基準日として中間配当をすることができる旨を定款に定めております。

c. 取締役及び監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する取締役（取締役であった者を含む。）及び監査役（監査役であった者を含む。）の責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役及び監査役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

．株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性9名 女性 - 名 (役員のうち女性の比率 - %)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 社長執行役員 CEO	中村 達生	1965年11月 25日生	1991年4月 株式会社三菱総合研究所入社 1994年10月 東京大学工学部助手 1997年10月 株式会社三菱総合研究所復職 2006年8月 株式会社創知(現当社)設立 代表取締役社長就任(現任) 2014年2月 VALUENEX, Inc.設立 Board of Director(CEO)就任(現任) 2018年4月 当社CEO就任(現任) 2019年2月 当社社長執行役員就任(現任)	(注)1	660,800
取締役 上席執行役員 CFO コーポレート本部長	鮫島 正明	1965年9月 15日生	1990年4月 株式会社太陽神戸三井銀行 (現株式会社三井住友銀行)入行 2000年2月 株式会社テレコメディア出向 2002年4月 株式会社三井住友銀行復職 2010年1月 SMBCコンサルティング株式会社出向 2013年10月 株式会社三井住友銀行復職 2019年8月 当社入社 コーポレート本部長就任(現任) 2019年10月 当社取締役就任(現任) 上席執行役員就任(現任) CFO就任(現任)	(注)1	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 執行役員 研究開発本部長	本多 克也	1963年 8 月 2 日生	1992年 6 月 新技術事業団 創造科学推進事業 (ERATO) 吉村パイ電子物質プロジェ クト研究員就任 1996年12月 科学技術振興事業団 創造科学推進事業 (ERATO) 田中国体融合プロジェクト 研究員就任 1998年10月 東京工業大学 応用セラミックス研究所 COE研究員就任 1999年 4 月 株式会社三菱総合研究所入 社 2008年10月 株式会社創知 (現当社) 入 社 2013年 1 月 当社取締役就任 (現任) ソリューション事業本部長 就任 2016年 1 月 当社研究開発本部長就任 (現任) 2019年 2 月 当社執行役員就任 (現任)	(注)1	1,600
取締役 執行役員 ソリューション事業推進本 部長	片桐 広貴	1971年 9 月 17日生	1997年 4 月 株式会社日本総合研究所入 社 2000年 9 月 コグニティブリサーチラボ 株式会社入社 2004年 7 月 株式会社ドリームトレイン インターネット入社 2007年10月 株式会社創知 (現当社) 入 社 2015年 6 月 当社取締役就任 (現任) ソリューション事業本部副 本部長就任 2016年 1 月 当社ソリューション事業本 部長兼事業推進本部長就任 2017年 4 月 当社ソリューション事業推 進本部長就任 (現任) 2019年 2 月 当社執行役員就任 (現任)	(注)1	3,600
取締役 上席執行役員 CINO 海外事業推進室長	Michael Samuel Kovach	1981年 3 月 24日生	2003年 1 月 Unishippers Global Logistics, LLC.入社 2003年 5 月 UniRates, Inc.設立CEO就 任 2010年 8 月 Pilot Communications (PTPAE), Inc.設立CEO就任 2016年10月 当社入社 2017年 9 月 当社海外事業推進室長就任 2019年 2 月 当社上席執行役員海外事業 推進室長就任 (現任) 2019年10月 当社取締役就任 (現任) CINO就任 (現任)	(注)1	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	鈴木 理晶	1975年 8月 21日生	2003年10月 弁護士登録 2003年10月 弁護士法人クレア法律事務所入所 2006年 4月 早稲田大学インキュベーション推進室 法務コンサルタント就任(現任) 2010年 6月 社団法人日本マーケティング・リサーチ協会(現「一般社団法人日本マーケティング・リサーチ協会」)プライベートマーク審査会委員就任(現任) 2012年 6月 弁護士法人クレア法律事務所パートナー 財団法人ベンチャーエンタープライズセンター(現「一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター」)理事就任(現任) 2014年12月 ターナー法律事務所開設所長弁護士(現任) 2016年10月 当社社外取締役就任(現任)	(注)1	-
常勤監査役	松田 均	1953年 6月 22日生	1977年 4月 三井物産株式会社入社 1989年 7月 同社中国広州事務所所長代理就任 1995年10月 ドイツ三井物産有限会社 Director、本店合成樹脂部長兼ミュンヘン事務所長就任 1998年 8月 香港AK&M貿易有限公司董事 総経理 2002年 7月 株式会社ニュー・マテリアル・サービス取締役副社長 就任 2013年 6月 三井物産株式会社退職 2013年 7月 株式会社ジーエヌアイ グループ取締役 代表執行役COO就任 2015年 4月 同社顧問就任 2015年 6月 ニッコー株式会社 非常勤監査役就任(現任) 2015年 7月 当社常勤監査役就任(現任) 2017年 8月 クオリップス株式会社 非常勤監査役就任	(注)3	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役	花堂 靖仁	1941年8月 9日生	1980年4月 國學院大學経済学部 教授就任 2003年4月 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授就任 2005年2月 経済産業省産業構造審議会 新成長政策部会 経営・知的財産小委員会委員 2005年9月 株式会社サンリオ アドバイザーボード 就任 2007年4月 早稲田大学大学院 特任教授就任 2007年5月 株式会社パルコ 社外取締役就任 2008年6月 株式会社サンリオ 取締役就任 2011年4月 株式会社ファルコン・ コンサルティング上席顧問 就任(現任) 2012年4月 早稲田大学知的資本研究会 上級顧問就任(現任) 2012年4月 國學院大學名誉教授就任 (現任) 2014年2月 VALUENEXコンサル ティング(現当社)監査役 就任(現任) 2017年4月 日本ナレッジマネジメント 学会会長就任	(注)3	5,100
監査役	宮内 宏	1960年9月 22日生	1985年4月 日本電気株式会社 入社 2001年4月 同社インターネットシステ ム研究所 研究部長就任 2008年12月 弁護士登録 (第二東京弁護士会) ひかり総合法律事務所 入所 2011年6月 宮内宏法律事務所 (現 宮内・水町IT法律事務 所)所長就任 (現任) 2015年7月 当社監査役就任(現任) 2017年11月 株式会社トウスイ監査役就 任(現任)	(注)3	-
計					671,100

(注)1. 取締役の任期は2019年10月28日開催の定時株主総会終了時から2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結のときまでであります。

2. 取締役鈴木理晶は社外取締役であります。

3. 監査役松田均、監査役花堂靖仁、監査役宮内宏の任期は2018年4月10日開催の臨時株主総会終了時から4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時株主総会終結のときまでであります。

4. 監査役松田均、監査役花堂靖仁、監査役宮内宏は社外監査役であります。

5. 当社は、業務執行の責任者として、権限・責任を明確化し、会社方針に基づく業務執行の迅速性と機動性の向上を図るとともに、人材登用拡大による意識向上及び、次期幹部候補育成の為、執行役員制度を導入しております。取締役を兼務している執行役員のほか、執行役員に就任している者は次のとおりであります。
- 吉田 卓司 (執行役員コーポレート本部経営企画担当)
6. 当社は、法令に定める監査役の数に欠けることになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は以下の通りであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (株)
茂田井 純一	1974年 3月19日生	1996年4月 朝日監査法人(現:有限責任あずさ監査法人)入社 2005年9月 クリフィックス税理士法人 入社 2006年6月 株式会社スタートトゥデイ(現:株式会社ZOZO) 非常勤監査役就任(現任) 2008年12月 株式会社アカウンティング・アシスト設立、代表取締役就任(現任) 2009年9月 株式会社ECナビ(現:株式会社Voyage Group) 非常勤監査役就任(現任) 2015年3月 株式会社ビジョン 非常勤監査役就任(現任)	

社外役員の状況

イ. 社外取締役及び社外監査役の数

社外取締役は1名であります。

社外監査役は3名(うち、常勤監査役1名)であります。

ロ. 各社外取締役及び社外監査役と提出会社との人的関係、資本的関係又は取引関係その他の利害関係

社外取締役鈴木理晶は、過去に当社又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当社のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。なお、同氏は当社の新株予約権15個を保有しております。

社外監査役松田均は、過去に当社又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当社のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。なお、同氏は当社の新株予約権23個を保有しております。

社外監査役花堂靖仁は、過去に当社又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当社のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。なお、同氏は当社の発行済株式5,100株及び新株予約権3個を保有しております。

社外監査役宮内宏は、過去に当社又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当社のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。なお、同氏は当社の新株予約権5個を保有しております。

ハ. 社外取締役又は社外監査役が提出会社の企業統治において果たす機能及び役割

社外役員による経営監視は、公正かつ透明性の高い企業統治をおこなう上で、非常に重要であると考えております。

なお、当社は社外取締役及び社外監査役の独立性に関する基準や方針についての特段の定めはありませんが、独立性に関しては、株式会社東京証券取引所が定める基準を参考にしており、一般株主と利益相反が生じるおそれのない社外取締役又は社外監査役を選任しており、経営の独立性を確保していると認識しております。

ニ. 社外取締役又は社外監査役の選任状況に関する提出会社の考え方

鈴木理晶は、大学でベンチャービジネス理論を学んだ経験を活かし、弁護士として、現在、各種の中小企業法務に携わっており、当社の社外取締役として適任であると考えております。

松田均は、会社経営全般に関する豊富な知識・経験と幅広い見識を有していることから、当社の社外監査役として適任であると判断しております。

花堂靖仁は、大学教授としての経験を有し、その豊富な経験から、当社の取締役に對して有益なアドバイスをいただくと判断し、社外監査役として選任しております。

宮内宏は、弁護士とデータの専門家としての豊富な知識と経験を有していることから当社の取締役に有益なアドバイスを頂けると判断し、社外監査役として選任しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監督と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携ならびに内部統制部門との関係

社外取締役1名は、取締役会において客観的かつ専門的分野から必要な助言及び監督機能を十分に果たしており、監査役会とも定期的に意見交換会を行い連携を図っております。

社外監査役3名のうち1名は常勤監査役に就任しており、日々の経営において、社外役員としての客観的見地から監視を行っており、非常勤監査役とも定期的に情報共有を図っております。

重要な会議や報告についても、常勤の社外役員により日常的に監視が行われ、必要に応じて、社内の様々な部門に対して、調査等を実施しております。

内部監査との連携につきましては、内部監査部門との定期的な情報共有のほか、日常的に相互の意見交換、質問等を行っており、内部監査の有効性に関する監視、検証を行うほか、相互の連携した監査も実施しております。

会計監査との連携につきましては、会計監査人に対し、必要に応じて随時、相互の意見交換、質問等を行っており、監査役監査の有効性に資する情報交換、会計監査の適性性に係る監視、検証を行っております。また、会計監査人との監査報告会を定期に実施し、情報共有を行っております。

内部統制との連携につきましては、内部統制部門である内部統制管理室との定期的な情報共有のほか、日常的に相互の意見交換、質問等を行っており、整備状況の適性性に関する監視、検証を行っております。

(3)【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役会は、社外監査役3名（有価証券報告書提出日現在、うち常勤監査役1名、非常勤監査役2名）で構成され、監査役会を原則3ヶ月に1回以上開催し、監査の方針、監査の方法、監査業務の執行に関する事項の決定を行っております。

常勤監査役は、監査役会において定めた監査計画等に従い、取締役会をはじめとする重要な会議への出席や、重要書類の閲覧、各本部へのヒアリング等を通じて、客観的・合理的な監査を実施しております。また、内部監査部門、会計監査人とも定期的かつ必要に応じて意見交換・情報交換を実施し、監査の実効性を高めております。非常勤の社外監査役は、常勤監査役と十分に意思疎通を図って連携し、内部統制部門からの各種報告を受け、監査役会での十分な議論を踏まえて監査を行っております。

当事業年度において当社は監査役会を14回開催しており、個々の監査役の出席状況は下表のとおりであります。

常勤監査役	松田均	当事業年度に開催した監査役会14回の全てに出席し、主に上場企業の役員として培った豊富な経験と見識のもと、必要に応じ、発言を行っております。
監査役	花堂靖仁	当事業年度に開催した監査役会14回のうち13回に出席し、主に大学教授としての会計を含む企業開示分野の専門的見地から、必要に応じ、発言を行っております。
監査役	宮内宏	当事業年度に開催した監査役会14回のうち13回に出席し、主に弁護士としての専門的見地から、必要に応じ、発言を行っております。

内部監査の状況

当社は、コーポレート本部に内部監査機能を保持させております。内部監査担当者は、業務の有効性及び効率性等を担保することを目的として、代表取締役社長による承認を得た内部監査計画に基づいて内部監査を実施し、監査結果を代表取締役社長に報告するとともに、監査対象となった被監査部門に対して業務改善等のために指摘を行い、後日、改善状況を確認します。内部監査担当者は、監査役及び会計監査人と定期的に会合を開催しており、監査に必要な情報の共有を行い、相互に連携を図っております。

なお、自己監査を回避するため、コーポレート本部の内部監査については、他の本部がコーポレート本部の内部監査を行うことで自己監査を回避しております。

会計監査の状況

イ．監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

ロ．継続監査期間

2年

ハ．業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 飯塚 徹

指定有限責任社員 業務執行社員 野瀬 直人

ニ．監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士5名、会計士試験合格者等4名、その他6名であります。

ホ．監査法人の選定方針と理由

当社は会計監査人として必要とされる専門性、独立性、品質管理体制、並びに当社グループの事業への深い理解の有無が、監査法人の選定において重要であると考えております。これらの基準を総合的に勘案した結果、EY新日本有限責任監査法人がこれらの基準を十分に満たしていると判断したため、同監査法人を会計監査人に選定しております。

監査役会は、会計監査人の職務の執行に支障がある場合等、その必要があると判断した場合は、株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

また、監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当すると認められる場合は、監査役全員の同意に基づき会計監査人を解任いたします。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会におきまして、会計監査人を解任した旨と解任の理由を報告いたします。

なお、同監査法人及び当社監査に従事する同監査法人の業務執行社員との間には、特別利害関係はありません。

へ．監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役及び監査役会は、会計監査人との意見交換及び指摘協議事項の有無ならびに会計監査人から受領する監査結果説明書の内容などを総合的に判断し、監査法人の評価を行っております。EY新日本有限責任監査法人について、会計監査人の適格性・独立性を害する事由等の発生はなく、適正な監査の遂行が可能であると評価しております。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）	監査証明業務に基づく報酬（千円）	非監査業務に基づく報酬（千円）
提出会社	14,955	-	23,040	1,800
連結子会社	-	-	-	-
計	14,955	-	23,040	1,800

ロ．非監査業務の内容

当社は、EY新日本有限責任監査法人に対して株式上場に係るコンフォートレター作成業務についての対価の支払いをしております。

ハ．その他の重要な報酬の内容

該当事項はありません。

二．監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬については、会計監査人から提出された監査計画の妥当性を検証の上、当該計画に示された監査時間等から監査報酬が合理的であると判断した上で決定することとしております。

ホ．監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算定根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行い、当該検証結果を踏まえて、報酬等の額について同意の判断をいたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社の役員報酬は、役位を基に役割や責任に応じて支給する固定報酬制となっており、株主総会で定められた報酬限度額の範囲内で、取締役会の決議により代表取締役社長に一任され決定いたします。

なお、当社役員の報酬等（取締役の使用人分給与は含まない）に関する株主総会決議内容等は以下のとおりであります。

取締役 年額300百万円（2018年4月10日開催 臨時株主総会）

監査役 年額 50百万円（2018年4月10日開催 臨時株主総会）

当事業年度の報酬額の決定については、2018年10月31日開催の取締役会において、報酬額の決定権限を代表取締役社長に一任する旨決議しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる役 員の員数 (人)
		基本報酬	ストックオプ ション	賞与	退職慰労金	
取締役(社外取締 役を除く)	39,420	39,420	-	-	-	4
監査役(社外監査 役を除く)	-	-	-	-	-	-
社外役員	16,440	-	-	-	-	4

役員ごとの連結報酬等の総額

連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの

総額(千円)	対象となる役員の員数(人)	内容
18,660	2	研究開発本部長及びソリューション事業推進本部長としての給与であります。

(5) 【株式の保有状況】

該当事項はありません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2018年8月1日から2019年7月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(2018年8月1日から2019年7月31日まで)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人により監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社グループは、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更等についての的確に対応することができる体制を整備するため、各種セミナーの参加や監査法人等が出版している様々な分野に関する専門書の購入等により、会計基準に関する情報を積極的に収集し、会計基準等の内容をより深く理解することに努めております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年7月31日)	当連結会計年度 (2019年7月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	310,997	958,089
売掛金	55,565	62,364
仕掛品	854	1,199
その他	14,654	19,174
流動資産合計	382,072	1,040,828
固定資産		
有形固定資産		
建物	13,492	13,492
減価償却累計額	2,388	3,082
建物(純額)	11,103	10,409
工具、器具及び備品	22,499	24,047
減価償却累計額	19,041	20,621
工具、器具及び備品(純額)	3,457	3,425
リース資産	3,497	3,497
減価償却累計額	1,107	1,806
リース資産(純額)	2,389	1,690
建設仮勘定	-	340
有形固定資産合計	16,950	15,865
無形固定資産		
ソフトウェア	514	76
無形固定資産合計	514	76
投資その他の資産		
繰延税金資産	13,946	264
その他	11,498	20,248
投資その他の資産合計	25,444	20,513
固定資産合計	42,909	36,455
資産合計	424,982	1,077,283
負債の部		
流動負債		
買掛金	6,966	6,078
短期借入金	80,000	-
リース債務	757	757
前受金	94,332	88,507
未払法人税等	290	7,355
賞与引当金	2,110	2,294
その他	31,542	31,752
流動負債合計	215,999	136,746
固定負債		
リース債務	1,893	1,136
固定負債合計	1,893	1,136
負債合計	217,893	137,882

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年7月31日)	当連結会計年度 (2019年7月31日)
純資産の部		
株主資本		
資本金	100,000	522,895
資本剰余金	113,168	536,064
利益剰余金	14,355	93,712
自己株式	22,500	22,500
株主資本合計	205,024	942,746
その他の包括利益累計額		
為替換算調整勘定	1,760	6,601
その他の包括利益累計額合計	1,760	6,601
新株予約権	3,825	3,255
純資産合計	207,089	939,400
負債純資産合計	424,982	1,077,283

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
売上高	507,744	557,885
売上原価	100,074	119,033
売上総利益	407,669	438,851
販売費及び一般管理費	330,662	515,198
営業利益又は営業損失()	77,007	76,347
営業外収益		
受取利息	7	76
受取補償金	1,642	-
助成金収入	-	570
その他	0	47
営業外収益合計	1,650	693
営業外費用		
支払利息	644	376
為替差損	161	981
上場関連費用	-	15,033
営業外費用合計	805	16,390
経常利益又は経常損失()	77,851	92,044
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	77,851	92,044
法人税、住民税及び事業税	8,071	2,344
法人税等調整額	13,946	13,679
法人税等合計	5,874	16,024
当期純利益又は当期純損失()	83,726	108,068
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失()	83,726	108,068

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)	当連結会計年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)
当期純利益又は当期純損失()	83,726	108,068
その他の包括利益		
為替換算調整勘定	160	4,841
その他の包括利益合計	160	4,841
包括利益	83,886	112,910
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	83,886	112,910

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	100,000	113,166	69,370	25,000	118,796
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純利益			83,726		83,726
自己株式の処分		2		2,500	2,502
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	2	83,726	2,500	86,228
当期末残高	100,000	113,168	14,355	22,500	205,024

	その他の包括利益累計額		新株予約権	純資産合計
	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	1,920	1,920	-	116,875
当期変動額				
親会社株主に帰属する当期純利益				83,726
自己株式の処分				2,502
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	160	160	3,825	3,985
当期変動額合計	160	160	3,825	90,213
当期末残高	1,760	1,760	3,825	207,089

当連結会計年度（自 2018年8月1日 至 2019年7月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	100,000	113,168	14,355	22,500	205,024
当期変動額					
親会社株主に帰属する当期純損失（ ）			108,068		108,068
新株の発行	411,942	411,942			823,885
新株の発行（新株予約権の行使）	10,952	10,952			21,905
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	422,895	422,895	108,068	-	737,722
当期末残高	522,895	536,064	93,712	22,500	942,746

	その他の包括利益累計額		新株予約権	純資産合計
	為替換算調整勘定	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	1,760	1,760	3,825	207,089
当期変動額				
親会社株主に帰属する当期純損失（ ）				108,068
新株の発行				823,885
新株の発行（新株予約権の行使）			569	21,335
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	4,841	4,841		4,841
当期変動額合計	4,841	4,841	569	732,311
当期末残高	6,601	6,601	3,255	939,400

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	77,851	92,044
減価償却費	4,063	3,516
受取利息	7	76
支払利息	644	376
上場関連費用	-	15,033
売上債権の増減額(は増加)	27,879	7,342
たな卸資産の増減額(は増加)	1,353	368
仕入債務の増減額(は減少)	155	998
前受金の増減額(は減少)	22,931	5,967
賞与引当金の増減額(は減少)	14	183
その他の流動資産の増減額(は増加)	4,198	5,565
その他の流動負債の増減額(は減少)	14,657	6,020
その他の固定資産の増減額(は増加)	3,182	400
小計	86,063	86,831
利息の受取額	7	76
利息の支払額	668	318
法人税等の支払額又は還付額(は支払)	7,232	290
営業活動によるキャッシュ・フロー	78,170	87,363
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	352	2,169
敷金及び保証金の差入による支出	-	8,989
投資活動によるキャッシュ・フロー	352	11,159
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額(は減少)	30,000	80,000
株式の発行による収入	-	830,188
新株予約権の発行による収入	3,825	-
自己株式の処分による収入	2,502	-
その他	757	757
財務活動によるキャッシュ・フロー	35,569	749,430
現金及び現金同等物に係る換算差額	123	3,814
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	113,510	647,092
現金及び現金同等物の期首残高	197,486	310,997
現金及び現金同等物の期末残高	310,997	958,089

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数 1社

連結子会社の名称

VALUENEX, Inc.

(2) 主要な非連結子会社の名称等

該当事項はありません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の関連会社数

該当事項はありません。

(2) 持分法を適用しない非連結子会社及び関連会社のうち主要な会社等の名称

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のVALUENEX, Inc.の決算日は12月31日であります。

連結財務諸表の作成に当たっては、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく財務諸表を使用しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

たな卸資産

仕掛品...個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

イ 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。ただし、建物及び2016年4月1日以降に取得した建物附属設備については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物	8～24年
工具、器具及び備品	3～15年

ロ 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、自社使用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(3年)に基づいております。

ハ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

賞与引当金

従業員の賞与支給に備えるため、支給見込額の当連結会計年度負担分を計上しております。

(4) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。なお、在外子会社等の資産及び負債は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定に含めて計上しております。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクを負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

イ 繰延資産の処理方法

株式交付費

支出時に全額費用として処理しております。

ロ 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

収益認識に関する会計基準等

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

ステップ1: 顧客との契約を識別する。

ステップ2: 契約における履行義務を識別する。

ステップ3: 取引価格を算定する。

ステップ4: 契約における履行義務に取引価格を配分する。

ステップ5: 履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年7月期の期首から適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中でありませぬ。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が13,946千円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が13,946千円増加しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりませぬ。

(連結貸借対照表関係)

当社においては、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく連結会計年度末における当座貸越契約に係る借入未実行残高は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年7月31日)	当連結会計年度 (2019年7月31日)
当座貸越極度額	80,000千円	80,000千円
借入実行残高	80,000	-
差引額	-	80,000

(連結損益計算書関係)

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)	当連結会計年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)
役員報酬	52,890千円	69,508千円
給料及び手当	91,261	148,158
業務委託費	46,605	60,971
賞与引当金繰入額	2,113	2,265

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)	当連結会計年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)
為替換算調整勘定：		
当期発生額	160千円	4,841千円
組替調整額	-	-
税効果調整前	160	4,841
税効果額	-	-
税効果調整後	160	4,841
その他の包括利益合計	160	4,841

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首株式数(株)	当連結会計年度増加株式数(株)	当連結会計年度減少株式数(株)	当連結会計年度末株式数(株)
発行済株式				
普通株式(注)1、2	7,754	2,318,446	-	2,326,200
合計	7,754	2,318,446	-	2,326,200
自己株式(注)1、3、4				
普通株式	200	59,800	6,000	54,000
合計	200	59,800	6,000	54,000

- (注) 1. 当社は、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の割合で株式分割を実施しております。
 2. 普通株式の発行済株式総数の増加2,318,446株は株式分割によるものであります。
 3. 普通株式の自己株式数の増加59,800株は株式分割によるものであります。
 4. 普通株式の自己株式の株式数の減少6,000株は、2018年4月10日付臨時株主総会決議による第三者割当による自己株式の処分による減少であります。

2. 新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(数)				当連結会計年度末残高(千円)
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社(親会社)	ストック・オプションとしての新株予約権	-	-	-	-	-	3,825
合計		-	-	-	-	-	3,825

3. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年8月1日 至 2019年7月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首株式数（株）	当連結会計年度増加株式数（株）	当連結会計年度減少株式数（株）	当連結会計年度末株式数（株）
発行済株式				
普通株式（注）	2,326,200	530,100	-	2,856,300
合計	2,326,200	530,100	-	2,856,300
自己株式（注）				
普通株式	54,000	-	-	54,000
合計	54,000	-	-	54,000

（注）普通株式の発行済株式総数の増加530,100株は、公募増資による増加420,000株、第三者割当増資（オーバーアロットメント）による増加66,700株、新株予約権行使による増加43,400株であります。

2. 新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の目的となる株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数（数）				当連結会計年度末残高（千円）
			当連結会計年度期首	当連結会計年度増加	当連結会計年度減少	当連結会計年度末	
提出会社（親会社）	ストック・オプションとしての新株予約権	-	-	-	-	-	3,255
合計		-	-	-	-	-	3,255

3. 配当に関する事項

該当事項はありません。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
現金及び預金勘定	310,997千円	958,089千円
現金及び現金同等物	310,997	958,089

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

有形固定資産

複合機であります(「工具、器具及び備品」)。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：千円)

	前連結会計年度 (2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (2019年 7月 31日)
1年内	808	808
1年超	2,358	1,550
合計	3,167	2,358

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、資金運用に関しては基本的には行わず、また、資金調達に関しては短期的な運転資金を銀行借入により調達しております。なお、デリバティブ取引に関しては行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。

営業債務である買掛金は、1年以内の支払期日となっております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、債権管理規程に従い、主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、財務状況の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の債権管理規程に準じて、同様の管理を行っております。

市場リスク（金利や為替の変動リスク）の管理

借入については、定期的に市場変動状況を確認し、金利状況を把握することでリスクを管理しております。

資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、月次単位での支払予定を把握する等の方法により、当該リスクを管理しております。連結子会社についても、当社に準じて、同様の管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することがあります。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度（2018年7月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	310,997	310,997	-
(2) 売掛金	55,565	55,565	-
資産計	366,562	366,562	-
(1) 買掛金	6,966	6,966	-
(2) 短期借入金	80,000	80,000	-
負債計	86,966	86,966	-

当連結会計年度（2019年7月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価(千円)	差額(千円)
(1) 現金及び預金	958,089	958,089	-
(2) 売掛金	62,364	62,364	-
資産計	1,020,454	1,020,454	-
(1) 買掛金	6,078	6,078	-
負債計	6,078	6,078	-

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法に関する事項

資 産

(1)現金及び預金、(2)売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

負 債

(1)買掛金

これは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

2. 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（2018年7月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	310,997	-	-	-
売掛金	55,565	-	-	-
合計	366,562	-	-	-

当連結会計年度（2019年7月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	958,089	-	-	-
売掛金	62,364	-	-	-
合計	1,020,454	-	-	-

3. 短期借入金の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2018年7月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	80,000	-	-	-	-	-
合計	80,000	-	-	-	-	-

当連結会計年度(2019年7月31日)

該当事項はありません。

(ストック・オプション等関係)

1. スtock・オプションに係る費用計上額及び科目名

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
売上原価の株式報酬費		
一般管理費の株式報酬費		

2. スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

(1) スtock・オプションの内容

	第3回新株予約権	第4回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 1名 当社監査役 1名	社外協力者 1名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 12,000株	普通株式 4,200株
付与日	2015年 8月 15日	2016年 3月 15日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	自 2017年 8月 1日 至 2025年 7月 31日	自 2018年 2月 24日 至 2026年 2月 23日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年 3月 28日付株式分割(普通株式 1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第5回新株予約権	第6回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 4名 当社監査役 3名 当社従業員 8名	当社従業員 3名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 11,700株	普通株式 1,800株
付与日	2016年 3月 15日	2016年 6月 30日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	自 2018年 3月 3日 至 2026年 3月 2日	自 2018年 6月 11日 至 2026年 3月 2日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年 3月 28日付株式分割(普通株式 1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第7回新株予約権	第8回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社取締役 1名 当社従業員 6名 当社子会社従業員 1名	当社従業員 2名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 16,500株	普通株式 1,200株
付与日	2017年2月28日	2017年5月15日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	自 2019年2月11日 至 2027年1月23日	自 2019年5月13日 至 2027年1月23日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第9回新株予約権	第10回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社従業員 3名	当社従業員 3名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 1,800株	普通株式 2,100株
付与日	2017年10月30日	2018年1月31日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	自 2019年10月27日 至 2027年10月26日	自 2020年1月15日 至 2027年10月26日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第11回新株予約権	第12回新株予約権
付与対象者の区分及び人数	当社従業員 3名	当社取締役 2名 当社子会社取締役 1名
株式の種類別のストック・オプションの数(注)	普通株式 1,800株	普通株式 225,000株
付与日	2018年3月12日	2018年7月4日
権利確定条件	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。	「第4 提出会社の状況 1 株式等の状況 (2) 新株予約権等の状況」に記載のとおりであります。
対象勤務期間	対象勤務期間の定めはありません。	対象勤務期間の定めはありません。
権利行使期間	自 2020年3月12日 至 2027年10月26日	自 2018年7月10日 至 2028年7月9日

(注) 株式数に換算して記載しております。なお、2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

(2) スtock・オプションの規模及びその変動状況

当連結会計年度(2019年7月期)において存在したStock・オプションを対象とし、Stock・オプションの数については、株式数に換算して記載しております。

Stock・オプションの数

	第3回新株予約権	第4回新株予約権
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末		
付与		
失効		
権利確定		
未確定残		
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末	12,000	4,200
権利確定		
権利行使	6,000	
失効		
未行使残	6,000	4,200

(注) 2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第5回新株予約権	第6回新株予約権
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末		
付与		
失効		
権利確定		
未確定残		
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末	9,300	1,200
権利確定		
権利行使	3,300	600
失効		
未行使残	6,000	600

(注) 2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第7回新株予約権	第8回新株予約権
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末	15,300	600
付与		
失効	1,200	600
権利確定	14,100	
未確定残		
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末		
権利確定	14,100	
権利行使		
失効		
未行使残	14,100	

(注) 2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第9回新株予約権	第10回新株予約権
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末	1,200	600
付与		
失効	600	
権利確定	600	
未確定残		600
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末		
権利確定	600	
権利行使		
失効		
未行使残	600	

(注) 2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

	第11回新株予約権	第12回新株予約権
権利確定前 (株)		
前連結会計年度末	1,800	
付与		
失効	600	
権利確定		
未確定残	1,200	
権利確定後 (株)		
前連結会計年度末		225,000
権利確定		
権利行使		33,500
失効		
未行使残		191,500

(注) 2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の株式数に換算して記載しております。

単価情報

	第3回新株予約権	第4回新株予約権
権利行使価格 (円)	100	120
行使時平均株価 (円)	4,210	
付与日における公正な評価単価 (円)		

	第5回新株予約権	第6回新株予約権
権利行使価格 (円)	120	120
行使時平均株価 (円)	4,015	3,770
付与日における公正な評価単価 (円)		

	第7回新株予約権	第8回新株予約権
権利行使価格 (円)	417	417
行使時平均株価 (円)		
付与日における公正な評価単価 (円)		

	第9回新株予約権	第10回新株予約権
権利行使価格 (円)	417	417
行使時平均株価 (円)		
付与日における公正な評価単価 (円)		

	第11回新株予約権	第12回新株予約権
権利行使価格 (円)	417	605
行使時平均株価 (円)		2,868
付与日における公正な評価単価 (円)		

(注) 第3回新株予約権から第11回新株予約権の価格に関しましては、2018年3月28日付株式分割(普通株式1株につき300株の割合)による分割後の価格に換算して記載しております。

3. ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法

ストック・オプション付与日時点において、当社は未公開企業であるため、ストック・オプションの公正な評価単価の見積方法を単位当たりの本源的価値の見積りによっております。また、単位当たりの本源的価値の見積方法は、第3回新株予約権乃至第11回目の新株予約権については時価純資産価額法、第12回新株予約権はDCF(ディスカунテッド・キャッシュフロー)法によっております。

4. ストック・オプションの権利確定数の見積方法

基本的には、将来の失効数の合理的な見積りは困難であるため、実績の失効数のみ反映される方法を採用しております。

5. ストック・オプションの単位当たりの本源的価値により算定を行う場合の当連結会計年度末における本源的価値の合計額及び当連結会計年度において権利行使されたストック・オプションの権利行使日における本源的価値の合計額

当連結会計年度末における本源的価値の合計額	448,308千円
当連結会計年度において権利行使されたストック・オプションの権利行使日における本源的価値の合計額	115,524千円

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年7月31日)	当連結会計年度 (2019年7月31日)
繰延税金資産		
前受金	29,342千円	33,408千円
税務上の繰越欠損金(注)2	26,754	60,230
減価償却超過額	23,822	15,248
その他	4,258	5,569
繰延税金資産小計	84,178	114,456
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)2	-	60,230
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	-	53,961
評価性引当額小計(注)1	70,231	114,191
繰延税金資産合計	13,946	264

(注)1. 評価性引当額は、前連結会計年度に比べ43,960千円増加しております。これは、主に連結親会社の繰越欠損金の増加によるものです。

(注)2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額
当連結会計年度(2019年7月31日)

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)	合計 (千円)
税務上の繰越欠損金()		8,067				52,163	60,230
評価性引当額		8,067				52,163	60,230
繰延税金資産							

() 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年7月31日)	当連結会計年度 (2019年7月31日)
法定実効税率	34.8%	税金等調整前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。
(調整)		
住民税均等割り	0.4	
評価性引当額の増減	41.3	
他国又は他地域との適用実効税率の相違による影響	2.5	
その他	1.0	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	7.6	

3. 外形標準課税の適用に伴う実効税率の変更

2018年10月の場面に際して行われた公募増資の結果、資本金が1億円超となり、外形標準課税適用法人となりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は、2019年8月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異について、従来の34.8%から30.6%となりました。

なお、この税率変更による影響は軽微であります。

(資産除去債務関係)

当社グループは、本社事務所等の不動産賃貸借契約に基づく退去日における原状回復義務を資産除去債務として認識しておりますが、当該債務の総額に重要性が乏しいため、記載を省略しております。

なお、当連結会計年度末における資産除去債務は、負債計上に代えて、不動産賃貸借契約に関連する敷金の回収が最終的に見込めないと認められる金額を合理的に見積り、当連結会計年度の負担に属する金額を費用に計上する方法によっております。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当社グループは、アルゴリズム事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位:千円)

	ASP	コンサルティング	その他	合計
外部顧客への売上高	161,541	346,103	99	507,744

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、特定の顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%に満たないため、主要な顧客ごとの情報の記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位:千円)

	ASP	コンサルティング	その他	合計
外部顧客への売上高	218,601	339,201	81	557,885

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位:千円)

日本	北米	欧州	その他	合計
437,088	107,344	13,452	-	557,885

(注) 売上高は、顧客の所在地を基礎とし、国又は地域ごとに分類しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、特定の顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の10%に満たないため、主要な顧客ごとの情報の記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】
該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】
該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】
該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主（会社等の場合に限ります。）等
重要性が乏しいため記載を省略しております。

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限ります。）等
前連結会計年度(自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)

関連当事者情報について記載すべき重要なものはありません。

当連結会計年度(自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (千円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有)割合	関連当事者 との関係	取引内容	取引金額 (千円)	科目	期末残高 (千円)
役員	工藤郁哉	-	-	当社取締役	被所有 直接 1.79%	-	新株予約権 の行使 (注)	20,975	-	-

(注) 当事業年度のストック・オプションの権利行使による払込金額を記載しております。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
1株当たり純資産額	89.46円	334.06円
1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額()	36.92円	40.71円

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、前連結会計年度は潜在株式は存在するものの、当社株式は非上場であったため、期中平均株価が把握できませんので記載しておりません。また、当連結会計年度は潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

2. 2018年3月9日開催の取締役会の決議により、2018年3月28日付で普通株式1株につき300株の株式分割を行っております。前連結会計年度の期首に株式分割が行われたと仮定して1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額()を算定しております。

3. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額()の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月 31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月 31日)
1株当たり当期純利益金額		
親会社株主に帰属する当期純利益金額又は親会社株主に帰属する当期純損失金額() (千円)	83,726	108,068
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額又は普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純損失金額()	83,726	108,068
普通株式の期中平均株式数(株)	2,267,778	2,654,356
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	第3回新株予約権 新株予約権の数 40個 普通株式 12,000株 第4回新株予約権 新株予約権の数 14個 普通株式 4,200株 第5回新株予約権 新株予約権の数 31個 普通株式 9,300株 第6回新株予約権 新株予約権の数 4個 普通株式 1,200株 第7回新株予約権 新株予約権の数 51個 普通株式 15,300株 第8回新株予約権 新株予約権の数 2個 普通株式 600株 第9回新株予約権 新株予約権の数 4個 普通株式 1,200株 第10回新株予約権 新株予約権の数 2個 普通株式 600株	

	前連結会計年度 (自 2017年 8月 1日 至 2018年 7月31日)	当連結会計年度 (自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月31日)
	第11回新株予約権 新株予約権の数 6個 普通株式 1,800株 第12回新株予約権 新株予約権の数 2,250個 普通株式 225,000株	

(重要な後発事象)
該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	80,000	-	-	-
1年以内に返済予定のリース債務	757	757	-	-
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	1,893	1,136	-	2020年～2022年
合計	82,650	1,893	-	-

(注) 1. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を定額法により各連結会計年度に配分しているため、記載しておりません。

2. リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下の通りであります。

	1年超2年以内 (千円)	2年超3年以内 (千円)	3年超4年以内 (千円)	4年超5年以内 (千円)
リース債務	757	378	-	-

【資産除去債務明細表】

該当事項はありません。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	91,661	217,103	425,352	557,885
税金等調整前四半期(当期) 純損失()(千円)	58,330	108,834	53,957	92,044
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純損失()(千 円)	58,402	123,345	68,705	108,068
1株当たり四半期(当期)純 損失()(円)	25.65	49.11	26.40	40.71

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益又は 純損失()(円)	25.65	23.46	19.57	14.05

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	285,876	842,830
売掛金	47,465	34,276
仕掛品	854	1,199
前渡金	5,969	-
前払費用	7,107	9,850
その他	16	9,222
流動資産合計	347,290	897,378
固定資産		
有形固定資産		
建物	13,492	13,492
減価償却累計額	2,388	3,082
建物(純額)	11,103	10,409
工具、器具及び備品	22,197	22,646
減価償却累計額	18,853	20,159
工具、器具及び備品(純額)	3,344	2,486
リース資産	3,497	3,497
減価償却累計額	1,107	1,806
リース資産(純額)	2,389	1,690
建設仮勘定	-	340
有形固定資産合計	16,837	14,926
無形固定資産		
ソフトウェア	514	76
無形固定資産合計	514	76
投資その他の資産		
繰延税金資産	13,946	-
関係会社株式	18,748	115,351
その他	11,461	20,248
投資その他の資産合計	44,156	135,599
固定資産合計	61,508	150,602
資産合計	408,798	1,047,980

(単位：千円)

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	6,966	6,078
短期借入金	80,000	-
リース債務	757	757
未払金	24,280	14,232
未払費用	3,380	4,785
未払法人税等	290	6,879
前受金	94,332	86,031
預り金	3,175	4,184
賞与引当金	2,110	2,294
流動負債合計	215,294	125,243
固定負債		
リース債務	1,893	1,136
固定負債合計	1,893	1,136
負債合計	217,188	126,379
純資産の部		
株主資本		
資本金	100,000	522,895
資本剰余金		
資本準備金	-	422,895
その他資本剰余金	109,282	109,282
資本剰余金合計	109,282	532,177
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	1,003	114,227
利益剰余金合計	1,003	114,227
自己株式	22,500	22,500
株主資本合計	187,785	918,345
新株予約権	3,825	3,255
純資産合計	191,610	921,600
負債純資産合計	408,798	1,047,980

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)	当事業年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)
売上高	461,386	466,039
売上原価	95,701	108,363
売上総利益	365,685	357,675
販売費及び一般管理費	317,124	442,671
営業利益又は営業損失()	48,560	84,995
営業外収益		
受取利息	0	75
受取補償金	1,642	-
助成金収入	-	570
その他	0	0
営業外収益合計	1,643	646
営業外費用		
支払利息	644	376
為替差損	49	575
上場関連費用	-	15,033
営業外費用合計	694	15,985
経常利益又は経常損失()	49,508	100,334
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	49,508	100,334
法人税、住民税及び事業税	290	950
法人税等調整額	13,946	13,946
法人税等合計	13,656	14,896
当期純利益又は当期純損失()	63,165	115,230

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)		当事業年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
労務費		33,521	35.6	27,083	24.9
経費		60,697	64.4	81,624	75.1
当期総製造費用		94,219	100.0	108,707	100.0
期首仕掛品たな卸高		2,337		854	
合計		96,556		109,562	
期末仕掛品たな卸高		854		1,199	
売上原価		95,701		108,363	

原価計算の方法

原価計算の方法は、個別原価計算による実際原価計算であります。

(注) 主な内訳は次のとおりであります。

項目	前事業年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)		当事業年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)	
	金額(千円)		金額(千円)	
サーバ管理費(千円)	17,314		23,838	
システム管理費(千円)	24,722		36,792	

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年8月1日 至 2018年7月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金		利益剰余金	
		その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	その他 利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金 合計
当期首残高	100,000	109,280	109,280	62,162	62,162
当期変動額					
当期純利益				63,165	63,165
自己株式の処分		2	2		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	2	2	63,165	63,165
当期末残高	100,000	109,282	109,282	1,003	1,003

	株主資本		新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計		
当期首残高	25,000	122,118	-	122,118
当期変動額				
当期純利益		63,165		63,165
自己株式の処分	2,500	2,502		2,502
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			3,825	3,825
当期変動額合計	2,500	65,667	3,825	69,492
当期末残高	22,500	187,785	3,825	191,610

当事業年度（自 2018年 8月 1日 至 2019年 7月31日）

（単位：千円）

	株主資本					
	資本金	資本剰余金			利益剰余金	
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計	その他 利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金 合計
当期首残高	100,000	-	109,282	109,282	1,003	1,003
当期変動額						
当期純損失（ ）					115,230	115,230
自己株式の処分						
新株の発行	411,942	411,942		411,942		
新株の発行（新株予約権の行使）	10,952	10,952		10,952		
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）						
当期変動額合計	422,895	422,895	-	422,895	115,230	115,230
当期末残高	522,895	422,895	109,282	532,177	114,227	114,227

	株主資本		新株予約権	純資産合計
	自己株式	株主資本合計		
当期首残高	22,500	187,785	3,825	191,610
当期変動額				
当期純損失（ ）		115,230		115,230
自己株式の処分				
新株の発行		823,885		823,885
新株の発行（新株予約権の行使）		21,905	569	21,336
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）				
当期変動額合計	-	730,560	569	729,991
当期末残高	22,500	918,345	3,255	921,600

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

仕掛品...個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)を採用しております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法を採用しております。ただし、建物及び2016年4月1日以降に取得した建物附属設備については、定額法を採用しております。

なお、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 8～24年

工具、器具及び備品 3～15年

(2) 無形固定資産

定額法を採用しております。

なお、自社使用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(3年)に基づいております。

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

4. 引当金の計上基準

賞与引当金

従業員の賞与支給に備えるため、支給見込額の当事業年度負担分を計上しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 繰延資産の処理方法

株式交付費

支出時に全額費用として処理しております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税抜方式によっております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 2018年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度の期首から適用し、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」が13,946千円減少し、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」が13,946千円増加しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取扱いに従って記載しておりません。

以下の事項について、記載を省略しております。

財務諸表等規則第121条第1項第1号に定める有価証券明細表については、同条第3項により、記載を省略しております。

(貸借対照表関係)

当社においては、運転資金の効率的な調達を行うため取引銀行と当座貸越契約を締結しております。この契約に基づく事業年度末における当座貸越契約に係る借入未実行残高は以下のとおりであります。

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
当座貸越極度額	80,000千円	80,000千円
借入実行残高	80,000	-
差引額	-	80,000

(損益計算書関係)

販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度44.5%、当事業年度37.6%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度55.5%、当事業年度62.4%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年8月1日 至 2018年7月31日)	当事業年度 (自 2018年8月1日 至 2019年7月31日)
役員報酬	43,800千円	55,860千円
給料及び手当	91,261	123,439
業務委託費	46,605	59,427
賞与引当金繰入額	2,113	2,265
減価償却費	3,612	2,950

(有価証券関係)

前事業年度(2018年7月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額は18,748千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度(2019年7月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額は115,351千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
繰延税金資産		
前受金	29,342千円	33,408千円
繰越欠損金	26,754	60,230
減価償却超過額	23,822	15,248
その他	3,635	5,115
繰延税金資産小計	83,554	114,002
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	-	60,230
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	-	53,772
評価性引当額小計	69,608	114,002
繰延税金資産合計	13,946	-

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
法定実効税率	34.8%	
(調整)		
住民税均等割り	0.6	
評価性引当額の増減	65.0	

	前事業年度 (2018年7月31日)	当事業年度 (2019年7月31日)
繰越欠損金期限切れ	2.0	税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。
その他	0.0	
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.6	

3. 外形標準課税の適用に伴う実効税率の変更

2018年10月の上場の際して行われた公募増資の結果、資本金が1億円超となり、外形標準課税適用法人となりました。これに伴い、繰延税金資産及び繰延税金負債の計算に使用する法定実効税率は、2019年8月1日に開始する事業年度以降に解消が見込まれる一時差異について、従来の34.8%から30.6%となりました。なお、この税率変更による影響は軽微であります。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (千円)	当期末残高 (千円)	当期末減価償却累計額又は償却累計額 (千円)	当期償却額 (千円)	差引当期末残高 (千円)
有形固定資産							
建物	13,492	-	-	13,492	3,082	693	10,409
工具、器具及び備品	22,197	448	-	22,646	20,159	1,306	2,486
リース資産	3,497	-	-	3,497	1,806	699	1,690
建設仮勘定	-	340	-	340	-	-	340
有形固定資産計	39,186	788	-	39,975	25,048	2,699	14,926
無形固定資産							
ソフトウェア	2,297	-	-	2,297	2,220	438	76
無形固定資産計	2,297	-	-	2,297	2,220	438	76

(注) 1. 当期増加額のうち主なものは次のとおりであります。

有形固定資産

工具、器具及び備品

業務用PC

448千円

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期増加額 (千円)	当期減少額 (目的使用) (千円)	当期減少額 (その他) (千円)	当期末残高 (千円)
賞与引当金	2,110	2,294	2,110	-	2,294

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	毎年8月1日から翌年7月31日まで
定時株主総会	毎年10月
基準日	毎年7月31日
剰余金の配当の基準日	毎年1月31日、毎年7月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	東京都千代田区丸の内1丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部 東京都千代田区丸の内1丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	電子公告としております。ただし、やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合には、日本経済新聞に掲載して行います。 電子公告掲載URL http://www.valuenex.com/
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨、定款に定めております。

- (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当及び募集新株予約権の割当を受ける権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- (1) 有価証券届出書（有償一般募集増資及び売出し）及びその添付書類
2018年9月25日関東財務局長に提出。
- (2) 有価証券届出書の訂正届出書
2018年10月2日、2018年10月11日及び2018年10月22日関東財務局長に提出。
2018年9月25日提出の有価証券届出書に係る訂正届出書であります。
- (3) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書
事業年度（第12期）（自 2017年8月1日 至 2018年7月31日）2018年10月31日関東財務局長に提出。
- (4) 四半期報告書及び確認書
第13期第1四半期（自 2018年8月1日 至 2018年10月31日） 2018年12月13日関東財務局長に提出。
第13期第2四半期（自 2018年11月1日 至 2019年1月31日） 2019年3月15日関東財務局長に提出。
第13期第3四半期（自 2019年2月1日 至 2019年4月30日） 2019年6月13日関東財務局長に提出。
- (5) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）規定に基づき臨時報告書
2018年10月31日関東財務局長に提出。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書

2019年10月28日

VALUENEX株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 飯塚 徹
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 野瀬 直人
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているVALUENEX株式会社の2018年8月1日から2019年7月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、VALUENEX株式会社及び連結子会社の2019年7月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年10月28日

VALUENEX株式会社
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 公認会計士 飯塚 徹
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 野瀬 直人
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているVALUENEX株式会社の2018年8月1日から2019年7月31日までの第13期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、VALUENEX株式会社の2019年7月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。